

向ふに従つて漸次短くなると共に、花瓣は其の先端玉の如く巻きて重なり合ひ、以て能く花心を被包し、所謂玉巻の段咲となれるものは優品として貴重せらる。一般に管物は花輪大にして花瓣の多きこと他に比類なく、すべて輪臺を設けて其の上に花瓣を展開せしめて觀賞するものとす。尙ほ太管間管細管等は何れも多數の品種を有す。

(一) 厚物 とは、花瓣數多重なりて球狀に盛りあがれる花形を有するものにして、花瓣は主として平瓣と匙瓣とより成る。而して之等の花瓣は一般に幅稍々廣く且つ兩縁より上方に巻き込みて溝形をなし、緊密に重なり合ふがため花瓣の垂下する虞なきを以て、輪臺を與へるの要なきのみならず、花持良好にして切花などに用ひるに可なり。歐米に於ける菊花の趣味は主として厚物にあるを以て、歐米に於ける厚物

圖七十八百第



物 厚

の改良は實に盛にして、近年我國に逆輸入せらるゝに至れり。尙ほ厚物の下部に太き管瓣ありて勢よく諸方に走り出でたるものは之を厚物走と稱し、厚物に比して花輪一層大なるの感あり。厚物及び厚物走には品種甚だ多し。

大摺咲も亦厚物の一種と見るべきものなるも、此の咲方に於ては花の内部にある數多の瓣が不規則に卷込みて、恰も摺み上げられたるが如き狀をなし、外方の瓣のみ走となつて諸方に射出するものなり。花瓣の數は厚物及び厚物走よりも少く、花瓣の盛上り方亦低きも、花瓣の狂ひ即ち卷込に活氣ありて花態豪壯の觀あり。品種少からず。

圖八十八百第



咲 摺 大

二、中菊 とは、花輪の大さ中等なるものを云

ひ、正菊(狂菊)肥後菊、嵯峨菊、伊勢菊、丁子菊等之に屬す。

(1) 正菊 は花冠の狂ひを賞する種類にして狂菊とも稱し、中菊中最も多く栽

培せらる。元來正菊と稱するものは、一輪の花に管瓣匙瓣及び平瓣の三種ありて(管抱は例外)而かも開花中花態の漸次に變化するものなり。今其の花態の變化を述べれば、最初は普通の菊と同様に、外部の花瓣より内部の花瓣に向つて漸次に開き、やがて花心の露出するほど十分に展開し終るや爾後花瓣殊に平瓣は更に一種の運動を起して反卷し之を抱又は狂と云ふ、花心爲に包藏せられ(露心抱は例外)て、花態は終に稍々球狀に變化す。正菊の最も觀賞に値するは實に此の期にありとす。尙ほ正菊は此の狂ひるまゝにて枯凋するものにして、普通の菊の落花する時の如く花態の醜くなることなきは其の長所とする所なり。而して正菊の狂ひ方には追抱、丸抱、亂抱、棲折抱、管抱、露心抱、自然抱等あり。

追抱とは最初に内側の一箇の平瓣が横に動くや、他の瓣は之を追ひ同方向に動き重なる狂ひ方を

圖九十八百第



抱 追

を云ひ、花心爲に包藏せられて花態稍々球狀をなすものとす。

丸抱とは花瓣が花心に向つて漸次に重なり合ひ、以て圓く花心を包藏するものを云ふ。

亂抱とは花瓣の動き方亂雜なるも能く花心を包藏するものを云ふ。

棲折抱とは花瓣の中央がくの字形に曲りて、恰も棲を折りたるが如くに端然と重なり合ひ、以て花心を包藏するものを云ふ。

管抱とは他の正菊の如く平瓣を有することなく、管瓣と匙瓣との二種又は其の一種を有するものにして、花瓣狂ひて花心を包藏すること前數種に等し。

露心抱とは平瓣の勢力概して強きに過ぐるがため、瓣端自ら巻き込みて花心を包藏すること能はず。隨て此の抱(狂)に於ては他の正菊と異なりて花心を露

圖十九百第



抱 折 棲

出するものとす。

自然抱とは他の正菊と異りて花瓣の全部が十分に展開せざる間に抱の始まるものにして、要するに咲きながら抱へ合ふて花心を包蔵するものとす。

(ロ) 肥後菊 とは、古來熊本

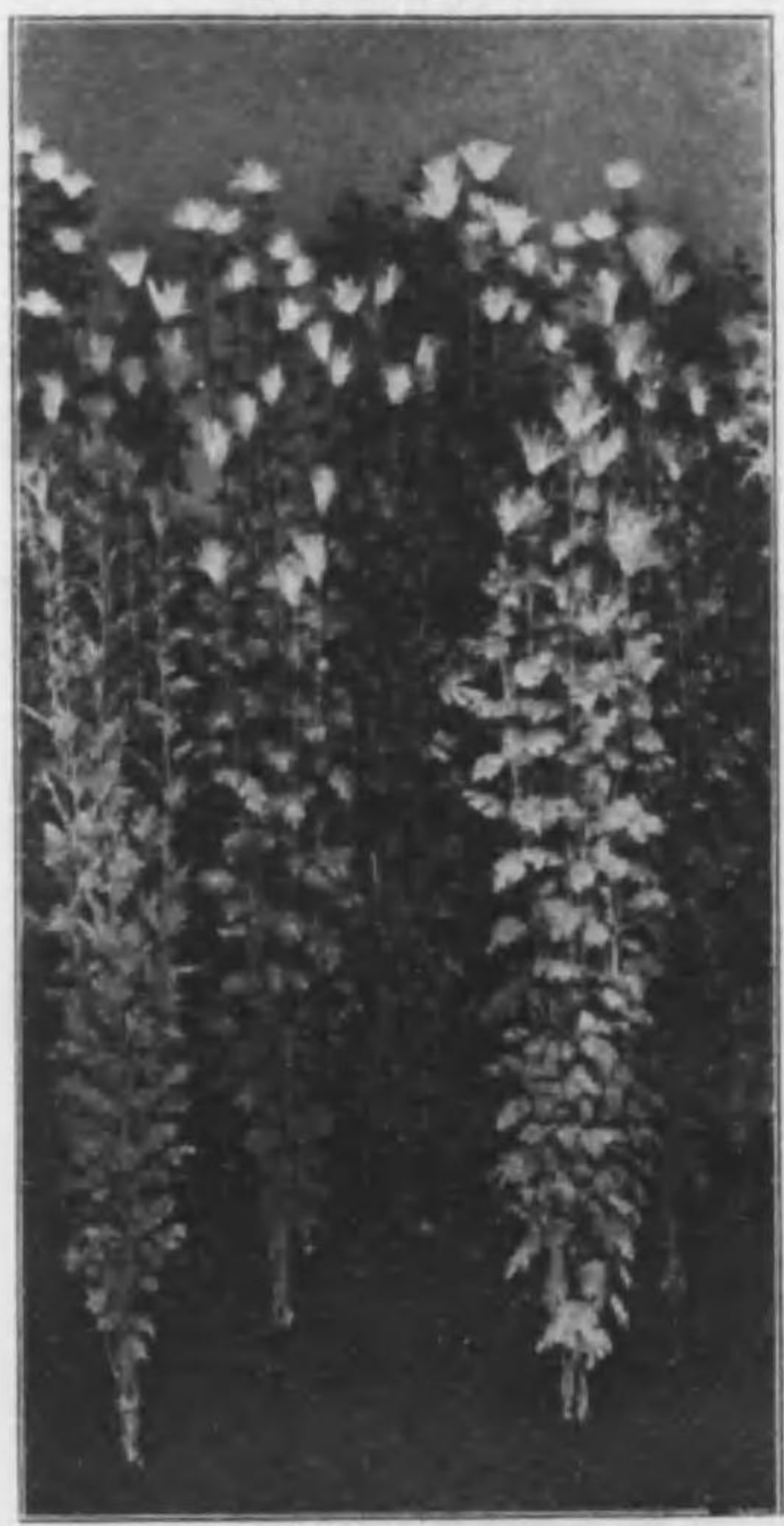
地方に栽培せられたるものにして、現今栽培せらるゝものは何れも單瓣にして平瓣のみより成るもの、管瓣のみより成るもの及び匙瓣のみより成るものの三種あり。花瓣は一般に細長くして瓣間に空隙多く花輪の大きさ種々あり。花色には赤、黄、白等種々あるも、何れも單色にして清楚の感あり。箒作として觀賞せらるゝを常とす。

圖一十九百第



菊 後 肥

圖二十九百第



菊 峨 嵯

(ハ) 嵯峨菊 は、京都地方に發達せる菊にして、京都の嵯峨にて古く作り出されたりとの説あり、花瓣は主として細長き平瓣より成るも、瓣の兩側が縦に裏面向つてよれるがため管瓣と誤認せらるゝことあり。但し時に眞の管瓣を混することもありとす。此の菊は開花の當初は花瓣諸方に展開し花心を露出するも、やがて花瓣はすべて直立

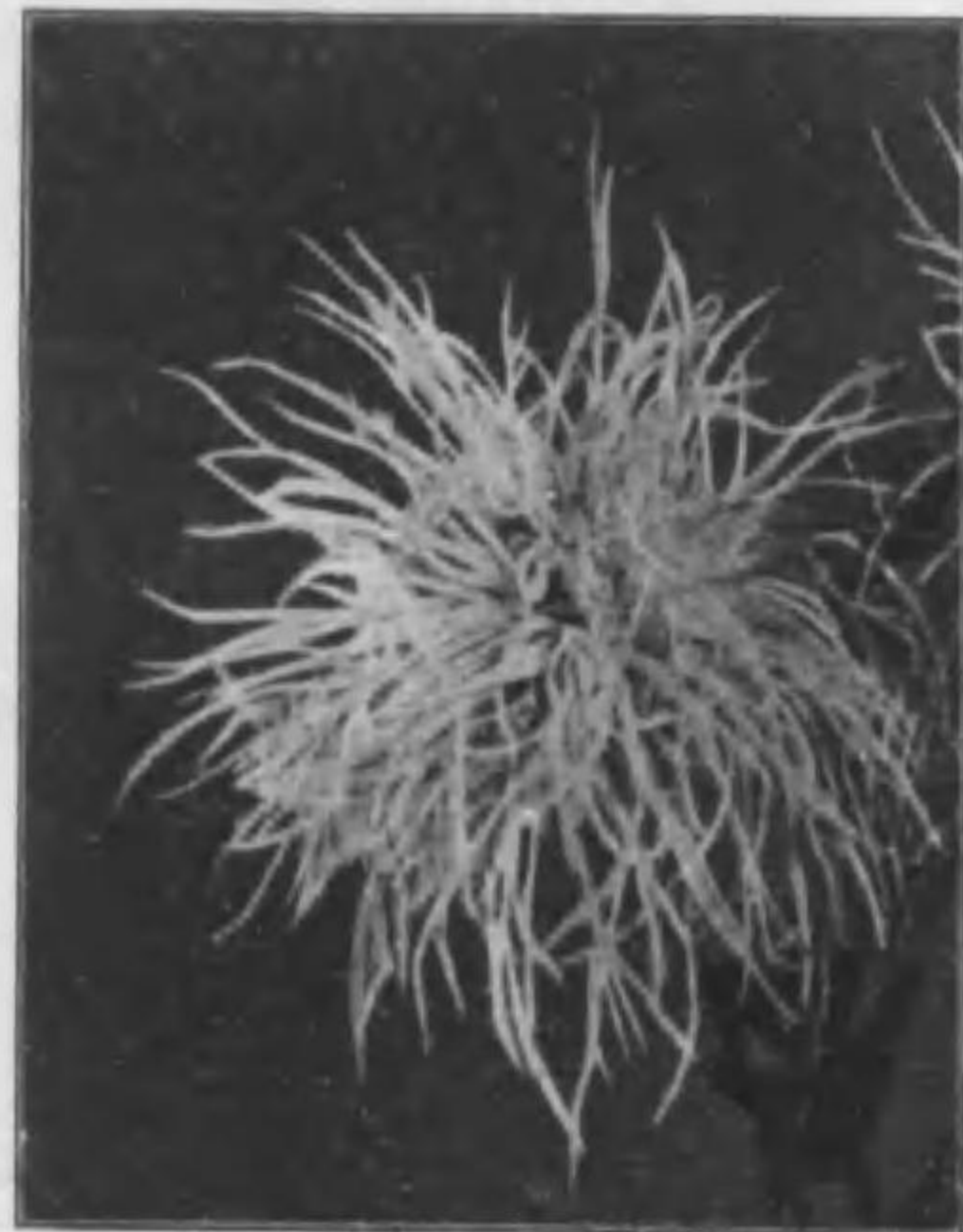
して第九十二圖に示すが如き形をなすに至るものとす。花の色彩には種々あるも、一般に單色にして澁味のあるもの貴重せらる。但し花壇を設くるに當りては、種々の色彩あるものを取混ぜて調和よく配置すること肝要なりとす。尙ほ此の菊は、肥後菊の如く箒作となすも、肥後菊に於けるが如く一株づゝ篠竹

を立て、箒作となすことなく、數株を一箇の篠竹に結び付けて箒作となすの相違あるものす。

(二) 伊勢菊 は、伊勢地方にて古く栽培せられたるものの如く、名稱の由來も蓋し之に因るが如し。此の菊は嵯峨菊と共に糸菊などと呼ばれたるほど花瓣細くよれ、又はねぢれて糸状をなすも、嵯峨菊の如く花瓣はすべて直立することなく、外側のものは長くして諸方に垂下するのみならず、嵯峨菊よりも瓣數多くして遙に賑かなる咲方をなすものとす。花色には種々あるみならず、一花に紅白(其他)の二色を現はし又は枝を異にして紅白(其他)の咲分をなすものもありとす。通例篠作となして觀賞す。

(*) 丁子菊 とは、花の中央にある筒狀花冠が發達して恰も丁子の花に似たる

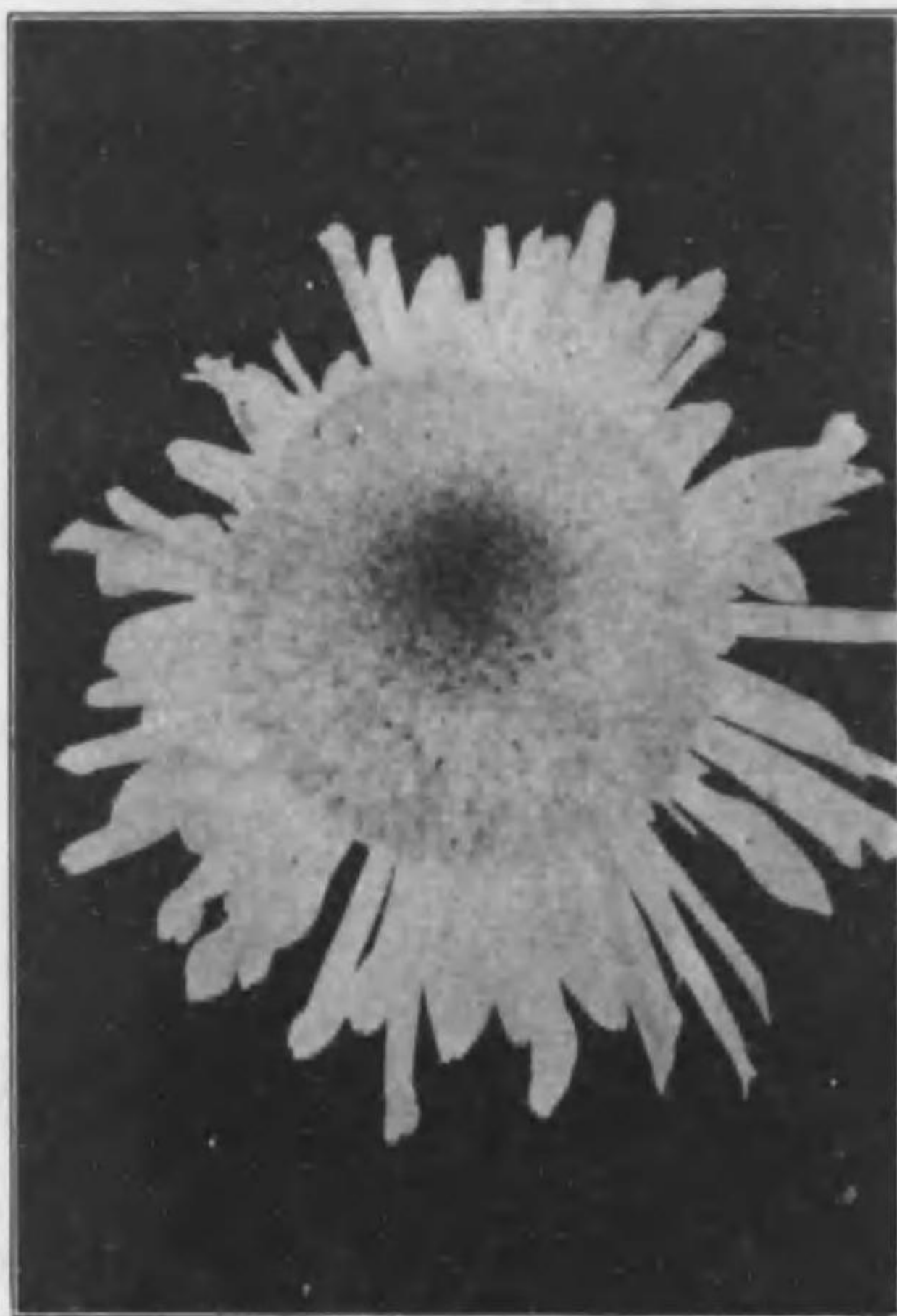
圖三十九百第



菊 勢 伊

形をなして花心を填充するものを云ふ。花の色彩には種々あるのみならず、中央の丁子瓣と周圍の花瓣とは色彩を異にするものと同一色彩を有するものとの別あり。又丁子菊の花輪には大小ありて、中菊に屬するものの外、小菊に屬するものもありとす。

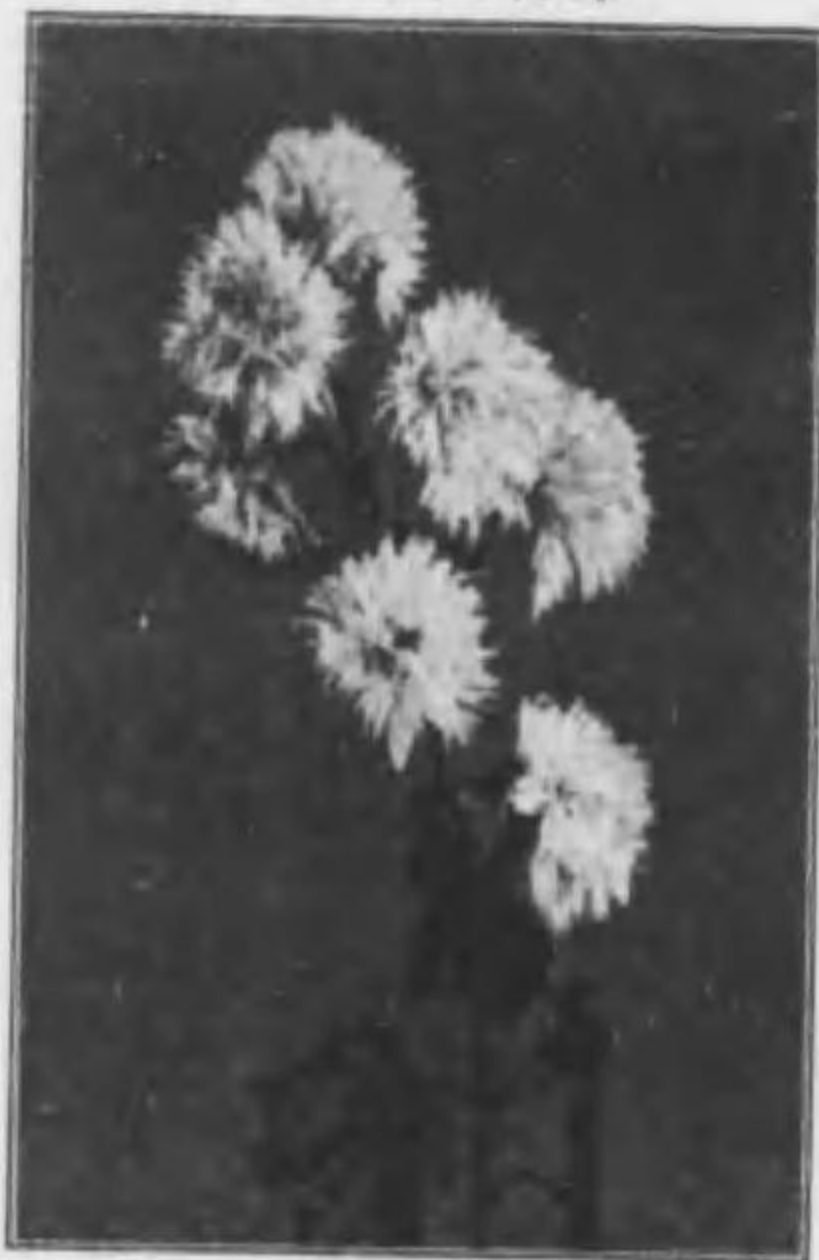
圖四十九百第



菊 子 丁

三、小菊 は、中菊に比して花輪の一層小なるものを云ひ、其の種類少からず。山菊野菊又は文人菊と稱し、近年懸崖作として觀賞せらるゝものは之に屬す。山菊は本邦の山野に自生せるものを栽培したるもの、如く、元來平瓣の單瓣種なるも、複瓣のものあるのみならず、花瓣の匙瓣又は管瓣より成るもの、丁子咲をなすものなどあり。其他小菊には針の如き細瓣を有し、一見薊の花に似たる咲

圖五十九百第



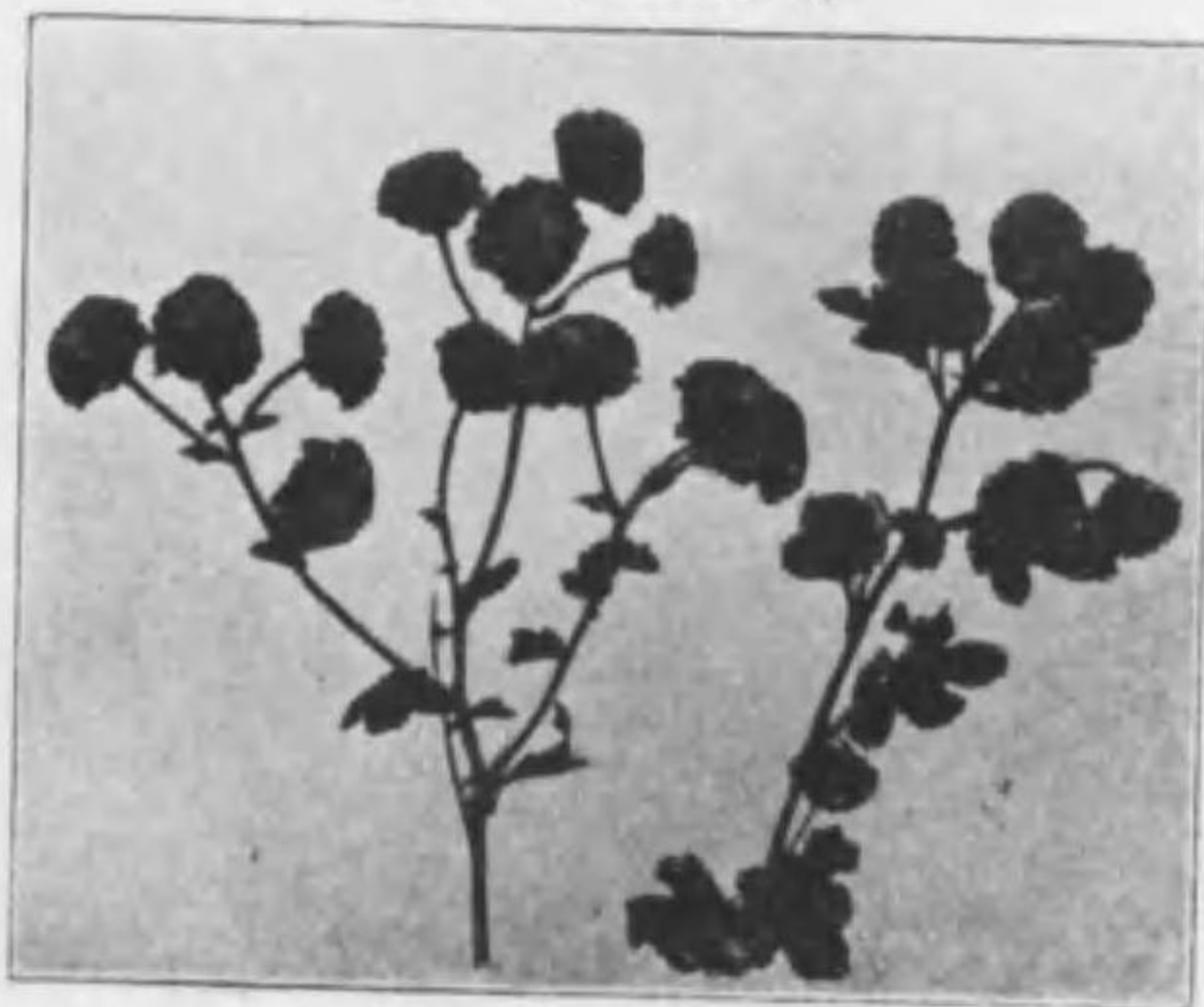
菊

方をなす貝咲菊あり。

一般に大菊は枝を分つこと少き性あるものにして通例一株を三本立となし(一本立二本立もあり)各々其の頂に一輪の花を開かしむ。之に反して中菊は分枝力強く、且つ一株を二三本立となして開花せしむるも、其の花輪の大きさは到底大菊に比すべくもあらざるを以て、中菊は一株より十數本乃至二十數本の枝を發生せしめて、其の各枝の頂に一輪づつ開花せしむるを常とす。又中菊中、殊に勢力の

方をなす菊あり。兩側より内曲せる小形の平瓣の重なり合ふて球状となれる魚子菊あり。小形の平瓣の稍々抱へたるものが、貝殻を積み重ねたるが如き咲

圖六十九百第



菊子魚

旺盛なるものは、數多分枝せしめて所謂千輪咲(大作)となすに可なり。千輪咲とは一株に數百輪の花を開かしむる仕立方なりとす。

第四節 菊の培養土

菊の培養に用ふる土壤は、腐植に富み膨軟にして排水よく且つ養分に富む可とす。一般に腐葉土其の他の腐植に富む土壤を日光に曝らして乾燥せしめたる後、約二分目位の篩に通して粗粒土を除き、更に約五厘目位の篩にかけて微塵粉を除きたる後、之に木炭末又は小砂利(米粒大)及び藁灰をば各々一二割許混和せるものなどは培養土として賞用せらる。

神社などの森には落葉自然に堆積して數多の歳月を経たるもの少からず。之等落葉の下層には腐葉土として適當なるもの存在するがゆゑに、之を利用するの便あれば甚だ可なるも、然らざる場合には適宜調製せざるべからず。落葉としては檜椎等の如き潤葉樹のものを可とし、松檜等針葉樹の落葉は樹脂多く腐熟困難なるがため不可なり。又梅櫻等の落葉は檜椎等のものと異なりて軟

質なるがため、排水不良のものを生ずる虞あり。尙ほ落葉の外、藁炭俵等も培養土調製の原料となすに可なるも、之等は三四寸の長さに切斷して用ふるを常とす。すべて之等の原料は地面に穴を堀りて堆積するも、濕地にては地上に板圍をなし其の圍内に堆積するを可とす。堆積の方法は先づ原料を踏込みて其の表面を平にしたる後、薄く土を被ふて稀薄の下肥又は下水などを撒布し、更に原料と土とを交互に積み重ね(下肥下水等を撒布しつゝ)三四尺の高さとなれば、其の上に亞鉛板などを覆ふて雨水の浸入を防ぐべし。而して此の堆積は時々切返し(内部のものを外に、外部のものを内にして積替をなす)を行ひ、且つ稀薄の下肥、下水などを撒布して全部平等に腐熟せしむること肝要なり。而して堆積及び切返しの際に稀薄の下肥、下水等を撒布するは腐敗バクテリアを輸入すると共に、原料に適度の濕氣を與へて腐敗酸酵を盛ならしめんがためなり。尙ほ腐熟すること遅きものには、切返しの際に少量の米糠を混ざるを可とす。通例培養土の調製は、翌年菊苗の植替に際して使用しうるやう秋季に着手するものとす。

第五節 菊の肥料

菊は肥料三要素中窒素を要すること最も多く、磷酸加里之に次ぐがゆゑに、肥料の配合に當りてはよく此の點に注意するを要す。現今菊の肥料として賞用せらるゝ油粕魚肥の如きは何れも三要素中窒素を含むこと最も多く、磷酸之に次ぐものにして、米糠藁灰などの混用せらるゝは磷酸加里を補はんがためなり(但し米糠は磷酸に次て窒素を供給し、又藁灰は肥料中の油分を鹼化す)。而して以上の肥料は種々の割合(例へば油粕八升、米糠三升、藁灰二升、土一斗又は魚肥七升、米糠三升、藁灰二升、土一斗等)を以て配合したる後、培養土に混じて箱蓋を密封す)などに填充し、適度の濕氣を與へて十分に腐敗酸酵せしめて用ふるものにして、其の間一回切返しを行ふを常とす(切返し後の酸酵は第一回ほど強からず、又白カビの發生も少し)。此くして調製せる肥土は菊栽培家の所謂乾燥肥料にして、箱内にては酸酵熱のため乾燥固結し居るを以て、粉碎して蔭乾したる後箱に入れて貯へ置くものとす。乾燥肥料は菊苗植付の際基肥として用ふる外、成長

中補肥として數回施用するものなり。其の他補肥には油粕のよく腐熟せる液肥を稀釋して用ふるのみならず、硫酸アンモニアなども亦其の約二三匁を一升の水に溶解して用ふることもあり。

第六節 菊の繁殖

菊の繁殖法には分株・挿木・接木・播種の諸法あるも、就中最も普通に行はるゝは分株及び挿木の二法とす。

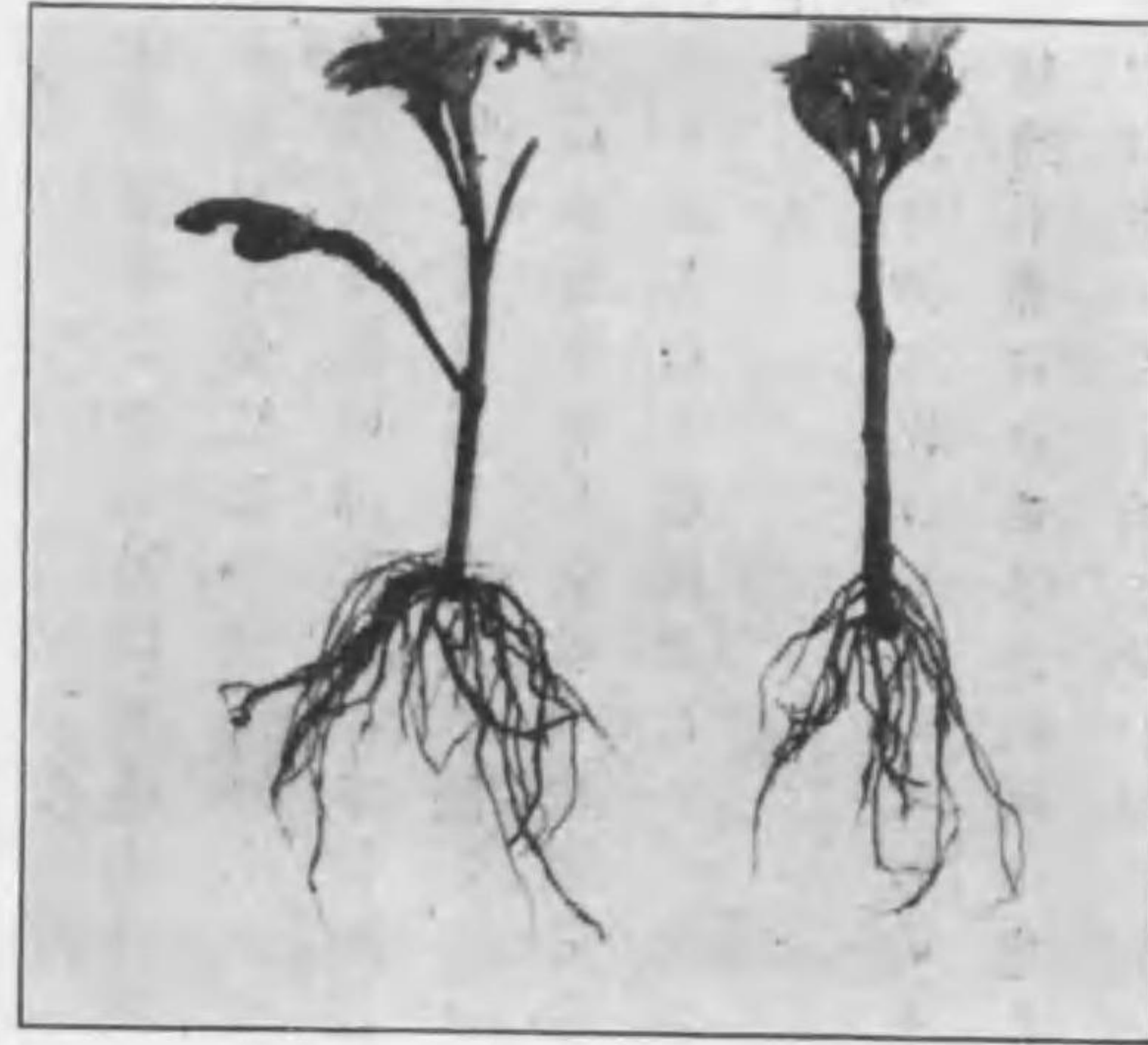
(一) 分株 分株を行ふには先づ日當りよき暖處を選んで苗床を設くべく、苗床の代りに淺き箱又は鉢を用ふることあり。苗床並に箱内の土壤は肥料分なき排水佳良のものを可とす。苗(嫩芽)は二三寸の間隔を以て深植とならざるやう眞直に植付くべく、植付終れば十分に灌水すべし。尙ほ苗床には防寒の設備を施すべく、フレームなどを用ひて苗床を造れば甚だ可なり。フレームを使用する場合には、夜間は硝子障子の上に菰などを被ふて寒氣を防ぐも、晴天の日中には日光にさらし又換氣を適當に行ふて苗を強健に發育せしむべし。又箱など

に植付けたるものは、晴天の日中には日光にさらし夜間は屋内に取入るゝを可とす。尙ほ灌水は晴天の日中に行ふべく、夕方灌水するときは床土を凍結せしむるの虞あり。苗の發育不良にして液肥を施す場合にも亦同様の注意をなすこと肝要なり。

分株の期節は十二月頃又は春彼岸頃を通例とするも、千輪咲(大作)などにはありては十一月中旬頃に分株をなして、温室又はフレーム内にて苗の養成を圖るものとす。又分株の際に於ける苗の選擇は、中等の發育をなせるものを可とし、少許の白根をつけて鋭利なる缺などにて切取るものとす。芽先僅に地上に露出して先端少しく青味を帯び、鬚根の少しく生ぜるものなども、十二月の分株に於ては往々苗として利用せらる。尙ほ親株より遠く離れて發生せる芽は、一般に賞用せらる。

(二) 挿木 挿木には成るべく莖の先端二三寸を切取りて用ふべく、莖節の直下に切る、下部になるほど組織硬化して發根不良なるを常とす。尙ほ挿穂の組織中に含まるゝ炭水化物の量が窒素に比して多き場合には、挿穂の發根良好な

第百九十七圖



菊の挿木

四五日間は風雨の當らざる日蔭に置き、爾後は葭簀を通して弱き光線を受けしめ、灌水に注意して土壤の乾燥を防ぐときは三週間内外にして發根するを常とす。かくて發根せるものは速に培養土を入れたる鉢などに移植すべく、長く箱

内に放置するときは、肥料分なきため苗の衰弱を招く虞あるものとす。

(三) 接木 接木は分株、挿木などの如く普通に行はれざるも、咲分の菊を作るなど特殊の場合に行ふことあり。菊の接木は接穂と砧木との莖の太さが略ぼ同大のものを選り割接となすを常とし、六月中旬頃に行ふこと多し。其の法、兩者の先端二三寸を切去れる後、砧木を縦に二つ割となし、其の割目に接穂の下端を左右より斜に削れるものを挿入し、兩者の皮部を密着せしめたる後、其の接合部の周圍をば濕りたる強靱の日本紙にて二三重に巻き、更に其の上をラファイアなどにて軽く縛り置くものとす。尙ほ木賊を切りて砧木に嵌め置き、接木せる後引上げて接合部を被ひ置くことあり。何れにしても接木せる菊は成るべく風の當らざる日蔭の場處に置き、時々接合部に細霧を吹きかけ以て接穂の萎凋を防ぐやうに注意するときは、二週間許にして大抵癒着するものなるも、爾後尙ほ十餘日を経たる後接合部の纏縛を解除すべし。

(四) 播種 播種は新品種を育成するがために行はるゝものにして、山菊などは採種容易なるも、大菊、中菊などの如く花部の改良進歩せるものにおいて、結實

不良にして採種困難なるを常とす。されば之等の改良種は施肥を少くして栽培し(自然雜種の虞なきやう注意し)、且つ花瓣を間引きて花心の筒狀花冠(結實する部分)を露出せしめ置き、雌雄蕊の熟するに及んで望む所の父本の花粉を母本の花心へ振りかくるを可とす。此くて採種用の花はすべて霜害にかゝらざるやう注意すべく、十二月中旬頃となれば一尺許の莖を附して花を切取り、葉を除きて二三日間日當りよき軒下などに吊下して十分乾燥せしめたる後花瓣を除き去し、翌年二月頃花心を揉み碎きて種子を採收するものとす。

菊の播種は四月頃に行ふものにして、之がためには先づ苗床を準備せざるべからず。苗床の土壤は肥料分少く膨軟にして排水よきを可とし、其の上に薄く川砂を撒布して種子を播き、種子の上には極めて薄く砂を撒布したる後、目の極めて細き如露にて十分に灌水すべし。尙ほ苗床の周圍は菰などにて圍ひ、床の上には油障子などを覆ふて雨のために床土のたゞかれざるやうにし、床土乾燥の場合には前記の如露にて適宜灌水すべし。やがて種子發芽せば、徐々に日光の照射及び空氣の流通を圖り、以て苗の強健となるやうに努め、本葉三四枚發生

の頃一旦假植を行ひ、更に本葉六七枚の頃本圃に定植するものとす。之等の實生苗は其の年の秋に開花するがゆゑに、優良と認むるもののみを残して繁殖すべし。實生の苗が其の筒性を發揮するには、少くも三年を要するものとす。

第七節 大菊の栽培法

大菊は、分株又は挿木によりて繁殖するも、後者によるを便とす。挿木は五六月頃に行ふものにして、莖を三本立となすもの、并に莖の伸び難き品種は、成るべく早く行ひ、一本立となすもの、并に莖の伸び易き品種は、遅くして可なり。

挿したる莖が充分に發根せば、培養土を入れたる徑五寸許の鉢に一本づつ移植すべく、此の際、少量の乾燥肥料を施すを可とす。而して三本立となすものは、苗の四寸内外に伸長せる頃に、其の芽先を僅に摘み去りて、三本

第百九十八圖



著先の先に着ける金針の鉤に枝を下方に引寄せたる

の腋芽を發生せしむべく、其の三本の枝は、勢力の均等を得ること肝要なるがゆゑに、強勢の枝は、成るべく早く、針金の鉤にて下方に引き下げるやうにすべし。又苗の發育に顧みて、適宜稀薄の液肥を與ふべく、害虫の驅除に注意すべし。害虫中、蚜蟲并に芽先の發育を害するスリップスはエキシロールの二十倍液にて驅除するを可とす。かくて七月中旬頃に至れば、三本の枝、適當に發育せる苗を選んで、徑一尺許の大鉢に定植すべく、一本立の定植は更に遅く行ふものにして鉢は徑七八寸にて足れり。定植の法は鉢の底孔の上に、貝殻又は鉢の破片などを載せ、鹿沼土の粗粒又は木炭の碎片などを七分許も入れたる後、少しく培養土を入れて、其上

圖九十九百第



狀るたけ付結に竹篠を枝三

圖百二第



(左) 高枝二 低枝一 のもき
(右) 高枝一 低枝二 のもき

に乾燥肥料を少しく撒布し、更に適宜、培養土を入れたる後、其の上に苗を置き、鉢の縁より二三寸の處まで培養土を入れ、再び乾燥肥料を少しく撒布し、極めて薄く土を被ふて、徐々に灌水するものとす。此の際用ふる培養土は、豫め灌水して、適度の濕氣を有せしむべく、又植付後の苗の高さは、三本の枝の中、最下位にあるものが鉢の縁より一寸弱の高さに在るを適當とす。大鉢に定植せる後は、九月初旬頃までに、乾燥肥料を少量づつ數回に與へ、且つ培養土をも數回に入れて、終に鉢の縁より一寸許下の處まで充たすものとす。其の間、苗の漸く長ずるに従ひ、三尺許の篠竹を立てて、之に枝を結び付くべく、其

圖 一 百 二 第



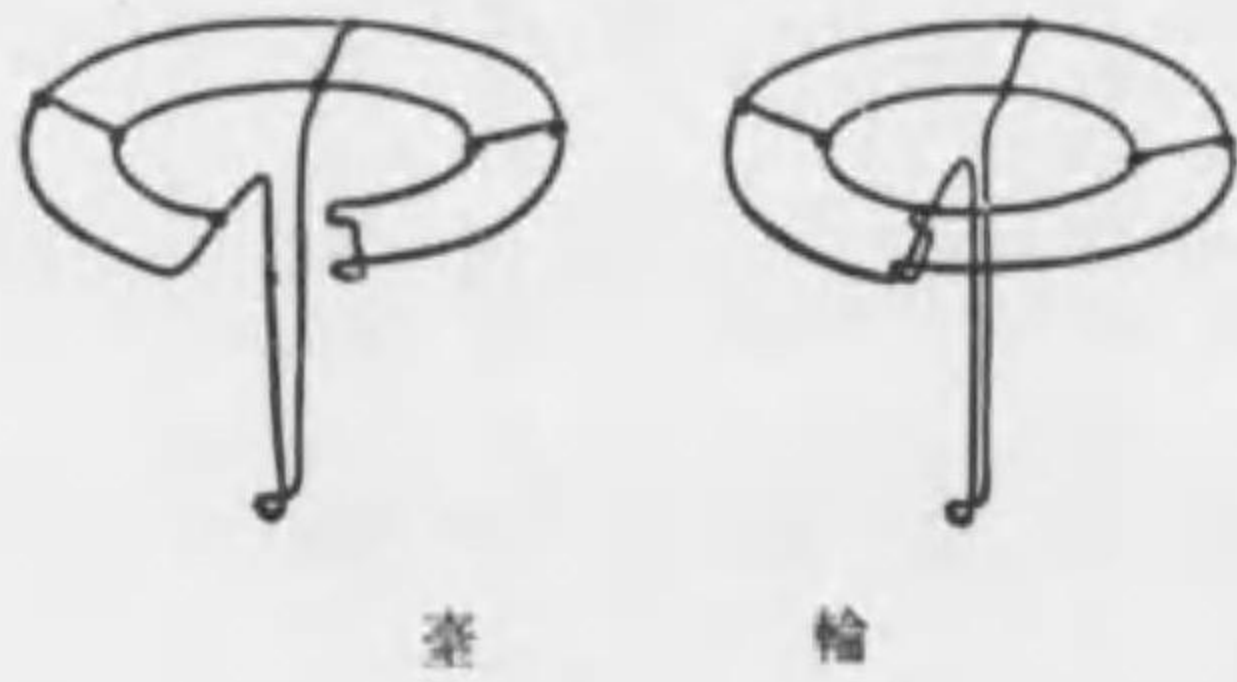
狀るぜ生の芽柳てり止育發の先芽

きものは、高き二本を低き一本の後に存せしむべく、之に反して、一本のみ特に高き場合には、其の高き枝を低き二枝の後方に配置すべし。其の他、定植後の手入として、病蟲害の防除に努むべく、尙ほ次の諸件に注意すること肝要なり。
一、灌・水・は、少きに失すること固より不可なるも、多きに過ぐれば、根の腐敗を來たすの虞あり。されば、暑氣の烈しき間は、午前と午後との二回に灌水するも、其

の際、三本立のものは、枝の又を割かぬやうに注意すべし。此の篠竹は、開花前に黒く塗れる篠竹などと交換するものにして、其の際、竹は必ず枝の後に添へて正面より見えざるやうにすべし。尙ほ、三枝中、二枝同長にして、一枝のみ低

の他は一回にて足れり。花蕾發生後開花し終るまでの間は、較々多く灌水すべし。
二、腋・芽・及・び・柳・芽・の・摘・除・ 葉腋に生ずる芽は、悉く摘み去りて、三本の枝を充分に發育せしむることに注意すべく、又八月頃(九月上旬頃にも生ず)に、芽先の發育止まりて、枝が三又となり、其の中央に花蕾の如きもの生ずることあり。之を柳芽と云ふ。蓋し柳の葉に似たる葉の中に花蕾の如きものを生ずるによりて此の名ありとす。此の場合には、其の中央の柳芽を除き、側方にある勢力強き芽を一本残して、發育せしむべし。
三、花・蕾・の・選・定・ 花蕾は枝の頂に生ずるものを存し、葉腋に生ずるものは、悉く除去すべし。尙ほ、枝頭には、數箇の花蕾簇生するがゆゑに、就中、最良のもの一箇を残すべく、通例中央のものを残すものとす。
四、輪・臺・の・取・付・ 大輪菊中、管物、一文字咲等には、花瓣の垂下するを防ぐがため、花蕾の稍々開きたる頃、添竹の頂に輪臺即ち花坐（はなざ）を設くるものにして、輪臺は、針金を曲げて造るを

圖 二 百 二 第



常とす。

五、菊の被覆 凡そ菊は、花壇植のものと鉢植のものとを問はず、花の開く頃に至れば、被覆物の内に置くを肝要とす。被覆物としては、左右及び後方を葎簀にて圍ひ、上方は屋根形となして、之に礫砂引障子又は油紙障子などを載するを常とす。斯く、菊の上に被覆をなす所以は、雨并に強き日光を避くるがためにして、同時に、又防霜の目的を達せんがためなり。蓋し雨霜は、花の命數を短縮し、強き日光は花の色澤を悪しくするの害あるによる。

第八節 中菊の栽培法

中菊(正菊即ち狂菊)を繁殖するには、分株を行ふを常とするも、分枝せしむること少き場合には挿木によることあり。但し中菊の挿木は大菊よりも早く行ふものとす。而して分株は十二月上中旬頃に行ひ、翌春四月下旬頃徑五六寸の鉢に移植し、更に一ヶ月許を経て徑一尺乃至一尺二寸許の大鉢に定植するを常とするも、春彼岸頃に分株を行ふことあり(分枝少きものに行ふ)。又千輪咲は十一月

●此の際徑八九寸の中鉢に移植し、八月中旬に至りて大鉢に定植することあり。

●摘心の際に残す腋芽の數は鉢の大きさに依りて相違あり

圖三百二第



中菊の籐作

上中旬頃に分株を行ふ。

中菊の苗は、四寸許に伸長せる頃第一回の摘心をなして三乃至五箇許の腋芽を伸長せしめ、右の數枝はやがて二乃至四箇許の腋芽を残して第二回の摘心を行ふ。爾後も處要の枝數を得るまで摘心するも、最後

の摘心は、七月初に終るを常とす。斯くて、發生せる枝は、夫々籐竹によりて適當の位置に支へ、爾後は葉腋より發生する所の腋芽を摘み去らざるべからず。斯く籐竹にて支へる仕立方を籐作と稱し、枝數の少きものに用ひられ、枝數多きものには梓作を行ふ。やがて、各枝の頂に花蕾多く顯はるるに至れば、就中良好のもの一箇を残し、以て、一本の枝に唯一輪開花せしむること大菊に等し。中菊には、一株より十數本乃至二十數本の枝を發生せしめて、其の各枝に一輪づつ開花

せしむるものと、一株より數百本の枝を發生せしめて、其の各枝に一輪づつ開花せしむる千輪咲との二種あるも、兩者の相異は、摘心を屢々行ひて、枝數を多くすると否とにありとす(尙ほ枝數多きものは摘心の際、殘す腋芽の數を多くす)。尙ほ、其の他の手入は、略々大菊に等しきも、分枝の數多きものにありては、施肥の量も亦多くするの要ありとす。

第九節 小菊の栽培法

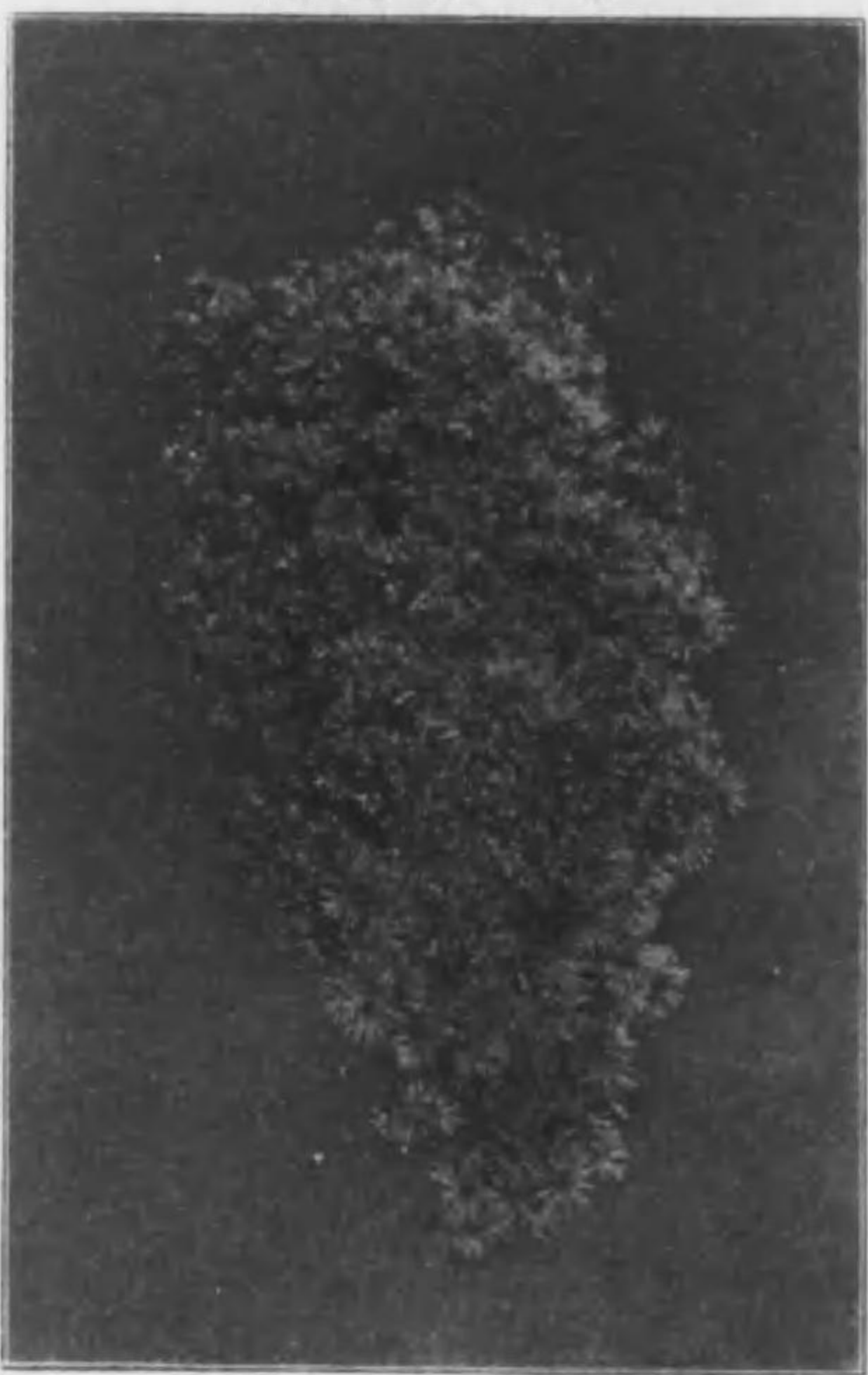
小菊を繁殖するには、十二月頃又は春彼岸頃に分株すること、中菊に等し。其の仕立方は一定せざるも、近年懸崖作となすこと行はる。之を行ふには、苗の一尺餘に伸びたる頃、添竹を以て、斜に上方に誘引し(後水平に誘引す)、之より生ずる側枝は、二箇許の腋芽を残して、反覆摘心し、以て枝を成るべく多く發生せしむべく、幹は摘心することなく、常に添竹に沿ふて、伸長せしむべし。尙ほ、添竹の先は、



千輪咲(作株)

第百四圖

第百五圖



小菊の懸崖作

ば、枝幹自然に垂下して、懸崖の如き姿勢をなし、之に無數の花を着け、頗る美觀を發揮するものなり。

第五十九章 蘭類

性状

蘭類(Orchid)は蘭科に屬する多年草にして、葉は互生又は對生するも、唯

一箇の葉を有するに過ぎざるヒトハラシ (*Dactyloctenium*) の如きものあり、又葉は著しく退化して鱗片となれるムエフラン (*Tecanorchis*) の如きものあり。花は通例三片づつ内外二層に排列せる不整齊の花被を有し、單生するか又は數花集りて穗狀花序・總狀花序・圓錐花序等の花序を形成す。花被の外層をなす三片は即ち萼片にして、同形又は殆ど同形をなすも、内層の三片即ち花瓣は兩側の兩片のみ同形にして、中央の一片即ち唇瓣 (*Labelium*) は種々の形をなし、大さ一ならざるも、通例最も美大にして、蘭花の美は主として此の瓣による。往々距 (又は囊) を有することあり、距の空洞内には蜜を有す。花粉を有する健全なる雄蕊は一箇又は二箇或は極めて稀に三箇ありて、花柱と結合して柱體 (*Column*) の上端に着生す。柱體は花軸の肉質延長體と見るべきものにして、其の後面は凸面をなし、前面は凹面をなして唇瓣に對するを通例とす。花粉粒は數多結合して花粉塊 (*Pollinia*) を形成し、柱體の頂端にある腔所 (*Clinandrium*) に着生するを常とし、指端にて分離すること容易なり。又此の花粉塊の着生する所より稍々内方には通例粘液を分泌する凹處あり。是れ即ち柱頭なりとす。子房は下位にして、果實は蒴より成

り、數多の細微なる種子を有す。尙ほ蘭類にては受胎作用行はるれば花の萎凋すること特に急激なるものなれば、長く花を觀賞するには受胎を避くること肝要なりとす。

類別栽培

蘭類には其の種類極めて多く、ベレー (*Bailey*) は一万五千種ありと云へり。之等多數の蘭類中、現今栽培せらるゝものは二千餘種と推定せらるゝも、雜種は年々増加し又原産地より採集して新に栽培せらるゝもの亦少からざるがゆゑに、栽培蘭の種類は年々増加の傾向あり。元來蘭類は世界各地に産し、本邦 (臺灣・琉球等) の暖地は殊に多し、にも二百餘種を産するも、其の大多數は熱帯及び亞熱帯の産にして、就中、現今栽培せらるゝものは熱帯亞細亞の産最も多く、熱帯亞弗利加・熱帯亞米利加産のもの之に次いで多し。而して之等熱帯産のものは温室内に於て栽培するものにして、本邦にては明治時代より貴族富豪の間に之が栽培漸く行はれ近年益々盛況の域に達せしが、其の以前に於ては臺灣・南支地方産の蘭類を唐室の如き低溫の室内にて栽培するに過ぎざりき。尙ほ本邦産のものにて栽培せらるゝものはセキコク・サギサウスル・ガラシ・シユンラ

ン等にして、之等は一般に堪寒性強く露地にて越冬するも、冬季暖處に取入るゝを可とす。

蘭類は生活の状態より分類するときは死物寄生蘭、氣生蘭、地生蘭の三類となすをうべきも、**死物寄生蘭**は全く綠葉を有せざるを以て同化の機能なく、隨て其の根を腐植の中に入れて有機養分を吸収して生活するを常とし、其の種類甚だ少く(本邦暖地に産するムエフランの如きは之に屬す)、觀賞の價値も亦少きを以て現今栽培せらるゝは氣生蘭及び地生蘭の二種とす。

(甲) **氣生蘭** は、主として熱帶・亞熱帶に産し、氣根を以て樹幹岩面などに着生し、主として空氣中の養分を吸収す。此の種の氣根には海綿質の部分ありて多くの水を吸収するに適す。尙ほ氣生蘭の種類によりては葉の基部に偽球莖 (Pseudobulb) と稱し、肥大して球狀(其の他の形狀)をなし、水及び養分を貯藏するものあり。エーリデス(本邦産のナゴランは之に屬す)、カットレア、オンシデューム、フアレノブシス、グアンダ、アングレ、カム(本邦産のフウランは之に屬す)等は氣生蘭に屬す。氣生蘭は羊齒オスマンの根、水苔、炭などに植付け、土を用ふることなし。

(乙) **地生蘭** とは根を空中に曝らすことを厭ふものにして、熱帶の外溫帶にも産し、シブリベヂューム、シムビヂューム、ソブラリア、アカランテ(本邦産のエピネは之に屬す)等は多く之に屬す。地生蘭は氣根を有せざるも、其の根は空氣の流通よきを要すること普通の植物に比すれば遙に大なるを以て、之が栽培に用ふる鉢には先づ其の底に炭片などを入れて排水をよくし、更に其の上に盛る所の土粒も亦小砂利ほどの大きさのものを用ひ、以て空氣の流通に便ならしめざるべからず。

今蘭類の主要なるものを舉げて其の栽培法を略説すること次の如し。

(一) エーリデス (Acridas) は氣生蘭に屬し、莖は概して長く直立し、常綠の葉は左右二列をなして數多密生し、莖の諸所より肥大せる氣根を發生す。夏季葉腋より長き花穂を生じ、總狀花序をなして芳香ある花を多く開く。唇瓣は上方に彎曲して先端尖るを常とす。多くは印度・マレー半島等の熱帶産なるも、本邦暖地の樹木、岩石などの上に自生するナゴラン (Acridas japonicum, Reichb.) は之に屬す。ナゴランは其の葉常綠根生にして、夏季根側より花莖を抽出し、其の先端に五六

筒の花を總狀に着くるものにして、花色は概して白色(淡綠色を帶ぶ)なるも、花被の内片には紅紫色の斑點あり。

エーリリデスを栽培するには、素焼鉢又は吊籠(Basket)の底の約半分ほどに炭又



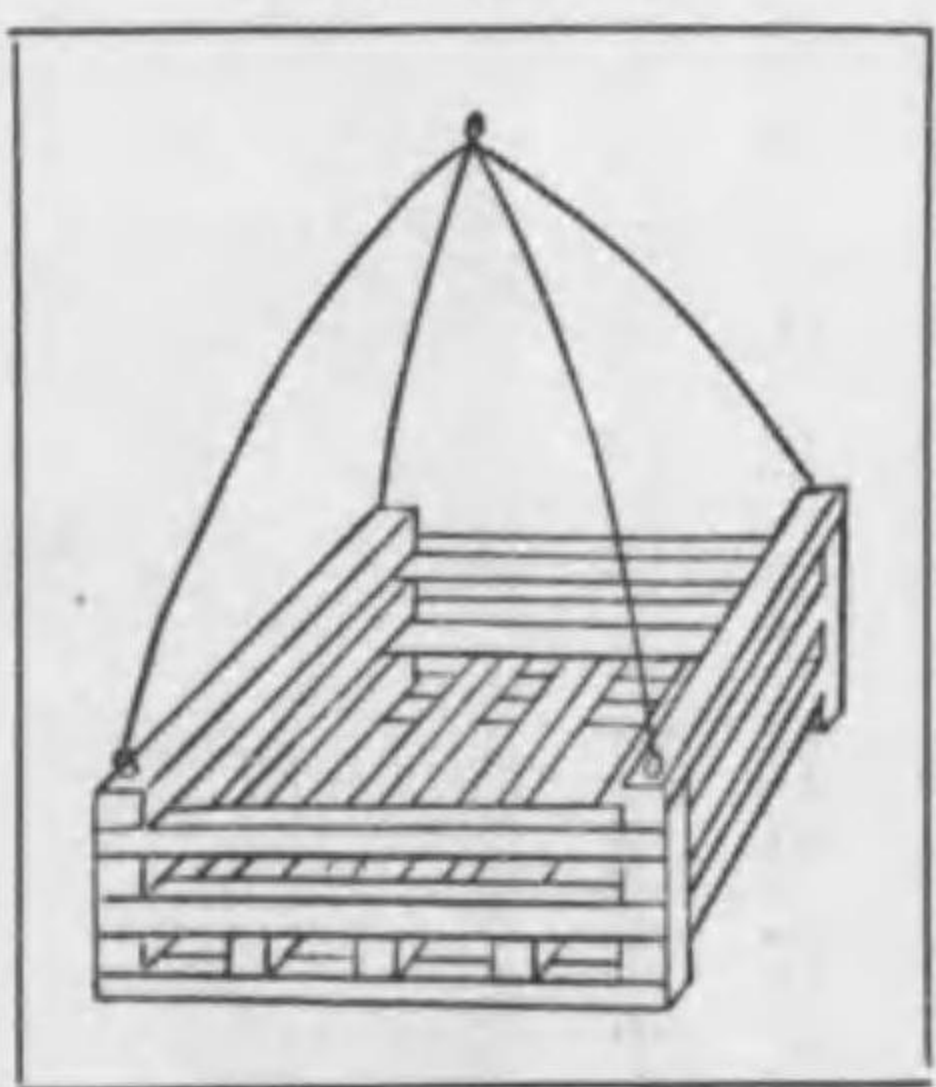
圖 六 百 二 第

ムターラドオ ステリーエ

は鉢の破片などを入れたる後、水苔と羊齒根(オスマンダと稱し、水苔よりも排水通氣よし)とを略等分に混合せるものにて植込むべく、此の際枯れたる根などをよく除去すべし。又エーリリデスを繁殖するには、莖の上部を切取りて他の鉢へ挿して新芽を發生せしむべく、其の時期は植替と等しく三四月頃を可とす(毎年三四月頃に植換を行ふ)。エーリリデスは高温室(冬の夜は六十五度乃至七十度、晝は之よりも五

度高く、夏までに十度許高むるを標準とす)中温室(冬の夜は六十度乃至六十五度、晝は七十度にして夏までに十度許高むるを標準とす)に栽培するを常とするも、ナゴランの如きは低温室(冬の夜は五十五度、晝は之よりも五度乃至十度高きもの)にてよく生育す。成長中は水分を要すること多く、夏は殊に然りとす。されど晩秋に至れば根端の發育漸く停止するがゆゑに、冬は乾燥に失して葉の萎凋することなき程度になし置くべし。又冬の弱き光線は直射せしめて可なるも、其の他の時期にありては、朝夕の外は遮断すべし。尙ほ莖には竹などを立て、支柱となすを可とす。

圖 七 百 二 第



トッケスバの用培栽蘭

(二) ヴァンダ (Vanda) も氣生蘭に屬し、印度其の他の地方に産し二十餘種あり。莖は短きものもあれども往々伸長し、又原産地にては樹幹を攀ぢつゝ、數丈の高さに達するものあり。葉は通例左右二列に並びて密生し、花梗は成熟せる莖の

葉間より抽出し、唇瓣は花柱に癒合して距を有す。就中、最も普通に栽培せらるゝグアンダ、トリコロール (*Vanda tricolor*, Lindl.) はジャバの原産にして、莖は直立し多数の葉を互生す。花被は淡黄色にして紅褐色の斑點を有し、唇瓣は紫紅色にして其の基部の裂片及び距は白色を呈す、變種多し。



ルーコロト、ダンアグ

圖八百二第

グアンダは一般に高温室の比較的低温の位置に置くを可とし、室内の空氣は濕潤に保つべく、而かも蒸熱に陥らざるやう換氣に注意するを要す。之を

植込むには新鮮なる水苔に木炭の粗片を混じたるものを用ひ、山高に填充すべく、鉢又は吊籠の何れに植込むも不可なしと雖ども、後者の方は排水佳良にして根の腐敗を起す虞なくして可なり。植込材料は乾燥せざるやう常に灌水を十

分にし、又清水を以て葉上にシリンド(撒水)を行ふべし。又光線を要すること多きがため、十一月より二月頃までは全く日除を行ふの要なく、其の他の時期と雖ども日除の厚きに過ぐるは却つて不利あり。繁殖は分株によるか又は莖より發生せる氣根の下より切取りて植付くるにあり。

(三) ファレーノブシス (*Phalaenopsis*) は、フィリッピン・マレー等の熱帶地方に産する氣生蘭にして、原産地にては晝猶ほ暗き密林中の低き枝幹又は岩石などに附



蘭蝶胡ルレルシ

着し、殊に水面に近き處によく生育すると云ふ。本屬には二十餘種ありて我國臺灣に産する胡蝶蘭も其の一種なりとす。一般に莖は甚だ短くして葉數少し。葉は長楕圓形又は楕圓狀披針形をなし革質

圖九百二第

にして厚く、緑色又は暗緑色を呈して無地のものと斑入のものとなり、莖の左右に展開す。花梗は細長にして彎曲し、少きは數輪、多きは數十輪の花を開き、其の花は比較的大輪にして萼片は開張し、側方の花瓣は大にして唇瓣は先端二分し、各一本づつ毛状の突起を有す。花色には白、淡紅、紫等ありて開花期長く、蘭室内には缺くべからざる良種なりとす。植物學の泰斗リンドレー(Lindley)をして嘆賞措く能はざらしめたるは當然と云ふべし。臺灣産の胡蝶蘭は楕圓狀披針形にして暗緑色の葉を有し、花被は白色にして唇瓣には黄色と紅色との線及び斑點を有し、多く夏に開花す。又シルレル胡蝶蘭(Phalaenopsis Schilleriana, Reichb. f.)はフィリッピンノ原産にして長楕圓形暗緑色にして表面に鼠色の斑紋ある葉を生ず。花被は帶紫桃色にして唇瓣も亦之と同色又は稍々淡色なるも、淡紅褐色の斑點と黄色の硬瘤を有し、原産地にては三月頃に開花す。發育良好なるものは百輪餘の花を着け頗る美觀あり。

フアレノブシスは蘭類中培養の最も困難なるものの一なり。蓋し此の蘭は熱帯の原産にして最も高温を要し、而かも空氣の十分に濕潤なるを好むもの

なれども、高温多濕なれば病菌發生して被害を招くがゆゑに、外界の空氣を直接觸接せしめざるやうに注意して換氣を十分に行ひ、以つて鬱蒸の弊に陥らしめざることを肝要なるも、高温多濕と氣通の良好とを併有せしむることは容易の業にあらざるによる。されば元來日照を忌む花草なるも、日照の最も弱き冬至の前後數十日間日除を除きて十分に日光に浴せしむる外、成るべく弱き光線を利用して強健なる發育を遂げしむることに注意すべく、植込材料及び植込の方法などにも工夫を要するは勿論、培養室の管理に細心の注意を拂ふこと肝要なり。植付には新鮮なる水苔を細切したるものを用ひて吊籠(Basket)又はヘゴ柱に植うるも、鉢植となす場合には木炭を長く切りて鉢の中央に立て、之に水苔を纏ひ鉢縁より稍々高く小山狀となし、其の上に根を跨らしめつゝ、オスマンダに一位の水苔を混じたるものにて植込み、更に其の上部に水苔を添付し鉢縁より高く盛り上るやうにすべし。フアレノブシスは根を緩く植込むを好まざるがゆゑに根の周圍を稍々堅く緊めるやうに詰め込むべし。移植は新芽の發生し始めたる頃又は落花後を可とす。尙ほ一旦植付けたるものは成るべく移植を

避け、毎年ピンセットなどを用ひて根を損傷せざるやう植込材料の更新を圖るを可とす。一般に冬季は休眠期なるを以て温度を稍々低くし、乾き加減となし、弱き光線に當て、強健に發育せしむること肝要なりとす。

(四)デンドロビウム (*Dendrobium*) は概ね氣生蘭にして、印度・濠州・比律賓・南支那等に自生し數百種の多きに達するものにして、本邦に産する石斛類も亦之に屬す。此の蘭は原産地にては多く樹木の枝幹に附着するを以て、希臘語の *Dendron* (木) 及び *Bios* (生育) の二語に因みてデンドロビウムの名生じたりと云ふ。

擬球莖即ち莖は通例長くして竹の節に似たる數多の莖節を有し、直立するもの倒臥するもの等種

圖 十 百 二 第



クコキセナバホオ

種あり。葉は多く楕圓狀披針形をなして莖端に近き數節に生じ、一年乃至數年の後脱落す。花は概して莖節より生ずる花梗上に一二輪乃至多數を着け、花輪小なるも美なり。花形區々にして花色に白・黄・紫・紅等種々あり。

本邦高山の岩上又は樹上に着生する**石斛** (*Dendrobium moniliforme*, Sw.) は莖叢生して六七寸の高さに達す。莖には明かなる節ありて稍々トクサに類す。葉は狭小の披針形にして厚く、花は白色又は淡紅色の花被を有し、莖の上部に生ず。其の他**オボバナセキコク** (*Dendrobium nobile*, Lindl.) と稱し二三年生の莖の上部數節に數箇づつ紫紅色大輪の花を開くものあり。ヒマラヤ地方及び南支那の原産にして二三尺の高さに達し、莖に明かなる節ありて硬く、葉は狭長橢圓形をなす。此の蘭は温室蘭中最も古く栽培せらるゝものの一にして、切花用として多く栽培せらる。又**インドキバナセキコク** (*Dendrobium Farmerii*, Paxt. var. *aureoflavum*, Hort.) は印度の原産にして黄色の花を開き美大なる總狀花序をなす。莖には節ありて一尺許の高さに達し、狭長橢圓形の葉を有す。

デンドロビウムには種類頗る多く培養の法亦隨て多少の相異あるがゆゑ

に、茲にはオホバナセキコクを主として述べん。植込は鉢又は吊籠に於てするを常とし、其の底には木炭片を敷き、水苔にオスマンダを混じたるものにて稍々堅く植込むものとす。植込の時期は落花後を可とす。やがて新芽發生するや、漸次に給水を多くし且つ温度を高むるものにして、日除は盛夏の日中のみとなし、其の他は十分に日光に浴せしむるものとす。尙ほ夏間は早目に(午後二時頃に)窓を密閉するも、九月上旬頃よりは窓の開放時間を長くし、終には夜間も開放すると共に給水を減じ、日除を除けるまゝとなし置くものにして、温度を低くし濕氣を少くして充實せしむるものとす。かくて十月下旬よりは夜間だけ窓を密閉し、十二月には晝夜共に窓を密閉し室内の温度を高め給水を十分にするとす。きは、やがて花蕾の出現を見るに至るものとす。即ちオホバナセキコク其の他落葉性のデンドロビウム(開花期に葉なし)は秋までに成長を終らしめ爾後は休養して組織の充實を圖るため温度を低下し給水を減少すべく、此くて二三ヶ月間経過せる後、温度を高め給水を多くして花蕾の發生を促すものとす。繁殖は分株を主とし又莖上に自然に生ずる小苗を切取りて養成するを可とす。尙

ほ多量に繁殖するには、古莖を二三節に切りて水苔に挿し、華氏八十度内外の高温を與へ、給水を十分にするとす。莖節より幼植物を生ずるを以て、之を切取りて小鉢に植ゑ養成すべし。又本邦産の石斛などは堪寒性强きを以て、完全なる温室にて越冬せしむるの要なきものとす。

(五) カットレア (Cattleya) はリンドレーが英國の博物學者カットレー (William Cattley) の名に因みて命名したるものにして氣生蘭に屬し、四十種内外あるも、多



圖一十百二第

ア レ ト ッ カ

くは熱帶亞米利加の原産にして殊にブラジルに多しとす。花は美大にして而かも栽培し易きがため、温室栽培蘭中最も重要なものの一とす。擬球莖ありて其の頂に一枚乃至三枚の

葉を生じ、葉の形状は披針狀橢圓形を常とし、革質にして厚し。花は擬球莖の頂即ち葉の基部より抽出せる花梗の上部に二三輪乃至十數輪を着生す。左右の花瓣は萼片よりも稍々廣大にして唇瓣は三裂し、左右の兩片は彎曲して筒狀をなし、其の先端及び中央片は色彩濃厚なるを常とす。此の蘭は次のレーリアに類するも、花粉塊はレーリアの半分即ち四筒あるに過ぎざるがゆゑに、容易に區別するをうべし。

カットレア、モツシエー (*Cattleya mossiae*, Hook.) は擬球莖(莖)の高さ七八寸に達し、長橢圓形にして革質の葉一箇を有す。花は甚だ大にして一花梗に二乃至五輪を開き紅色を呈す。變種多し。又カットレア、トリアネー (*Cattleya trianae*, Lindl. et Reichb. f.) は擬球莖の高さ五六寸にして、長橢圓形革質の葉一箇を有す。花は甚だ大にして一花梗に二乃至五輪を開き淡紫紅色を呈し、唇瓣の喉頭は黄色にして、其の瓣端は濃紅紫色を呈す。變種多し。

カットレアは鉢・吊籠・ヘゴ板などに植付くるものにして鉢植となすには鉢底の三分の一乃至二ほど木炭の破片を入れ、其の上にオスマンダ二分に水苔一分

を混じたるものを以て堅く植込むを可とし、籠植亦之に準ず。而してヘゴ板に植付くるには板の表面に細切せる植込材料を張り、其の上に根をよく擴げ、水苔を堅く根の間に詰込みたる後眞鍮の針金などにて纏縛し、灌水及びシンヂを行ふときは容易に發根して板に着生す。植込の時期は休眠終りて活動を開始し、新根の發生する頃を適當とするも落花後に行ふこともありとす。植付終れば稍々低溫の場合に置き、棚の上鉢の間などに撒水し、而かも猶ほ鉢内の乾燥に過ぐる虞ある場合には根の周圍に少しく灌水すべし。かくて新根の伸長するに伴ひ、漸次水量を増加し、日光に當て、空氣の流通をよくし、溫度を高めて元の如くすべきも、一般にカットレアは中溫室の培養に適し、甚しき高温を要せざるものなり。新しき擬球莖(莖)の半ば伸長せる頃は成長の最も盛なる時なるを以て給水亦最も多きを要するも、新莖の發育中止せば再び給水を減じ、休眠期には乾き加減に保つを可とす。尙ほカットレアは日照の多きを好み換氣の十分なるを要するがゆゑに、盛夏中と雖ども朝早く一二時間は弱光線に當つるべく、殊に冬季休眠中は十分に日光に浴せしむること肝要なり。又通氣をよくするがた

め温室の風窓は夏季に於ては晝夜の別なく開放し置くべく、冬間も温度の許す限り開放するを可とす。又カットレアは屢々移植せざるを可とするがゆゑに、通例三年目に植替を行ふを常とし、繁殖は此の際分株によりて行ふものとす。其の他莖老熟して落葉し、擬球莖のみ多く残存する場合には、一箇の新芽に二箇の擬球莖を残して他の古きものを切去るべし。

(六) レーリア (Laelia) は氣生蘭に屬し、花の美大なるを以て貴重せらる。性カットレアに近似するも、花粉塊は八箇(カットレアの倍)あるを以て容易に區別せらる。レーリオカットレア (Laelio-Cattleya) と稱するものは右兩屬の雜種にして近年多く作出せらる。レーリアはメキシコ・ブラジル等の原産にして低温室乃至中温室にて培養するに可なり。培養法も亦大體カットレアに準ず。

(七) シブリーブヂューム (Cypripedium) は希臘語の Kypria (女神ヱイナス) と Podion (上靴) とより合成せられたる名稱にして、蓋し此の蘭の花は唇瓣が袋狀をなして上靴に似たる所あるより斯くは命名せられたるものとす。本屬は蘭類中最も廣く栽培せらるゝものの一にして其の種類頗る多く、其の産地は東西兩半球に

圖二十百二第



ムーニヂムリブシ

分布するも、園藝上重要なるものは印度・支那・マレー半島・比律賓等に産し、本邦に自生するアツモリサウ (Cypripedium macranthum, Sw. var. ventricosum, Rehb. f.)、クマガイサウ (Cypripedium japonicum, Thunb.) 等の如き亦之に屬す。本屬の大部分は地生蘭に屬す。

アツモリサウ は本邦山地に自生して莖の高さ一尺餘に達す。葉は長卵形にして先端尖り、莖を抱擁して互生す。花は莖頂に一箇を生じ、大輪にして淡紅色を呈する母衣狀の唇瓣を有す。クマガイサウも亦本邦の山地に自生し、莖の高さ一尺餘に達し、其の上部に二箇の扇狀をなせる大葉を生ず。花は莖頭に單生し、帶紫色にして母衣狀をなせる唇瓣を有す。又シブリーブヂューム、インシグ

圖三十百二第



ウサイガマク

ネ (Cypripedium insigne, Wall.)
 は印度の原産にして外國
 種中最も普通に培養せら
 るゝものにして、花の形状
 アツモリサウに類し、黄緑
 色にして紫褐色の斑點及
 び條線あり。

本邦野生のシブリベデ

ユームを栽培するには、秋末落葉後又は早春發芽前に地下莖を損傷せざるやう深く丁寧な掘採りて半蔭の露地に植付くべく、腐葉土に赤土の粗粒を混ぜるものなどを用ひて鉢植も亦之に準ず。發芽後は強き日光を避けること肝要にして、葉の枯凋せる後は鉢植のものは鉢のまゝ土中に埋むべく、地植のものは落葉などを被ふて保護すべし。要するに自生地の状態に適應するやう工夫して培養すべく、又自生地より掘採りて運搬する際、根を日光にさらし乾燥せしむるが

如きは嚴に避けざるべからず。

次に外國産のシブリベデユームは種類によりて一ならざるも、多くは中温室にて栽培するに宜しく、カットレアなどに比較すれば日光の直射を好まざるが故に、夏季は殆ど終日二枚簀の下に置き、秋に至れば一枚簀となして漸次弱光を受けしめ、冬季は日中の外は簀を除きて日光に當らしむるを可とす。又此の蘭は殆ど四季を通じて發育するが故に、濕氣の供給を十分にし、液肥も時に施すを可とす。之を培養するには、鉢植となし、繁殖は分株によるを常とす。鉢植となすには、其の底に瓦の破片、木炭の細片などを三分一許の深さに入れ、其の上に微塵粉を除ける腐葉土八分に木炭と鉢の破片を徑一分位に破碎せるもの一分と水苔を細切せるもの一分とを混合せるものを用ひて、根を擴げつゝ葉との界まで填充し、鉢縁より五六分下まで、更に其の表面には鉢縁に達するまで生活力ある水苔を被ふて、葉の基部五六分を水苔中に埋没せしむるものとす。かくて植込終れば十分に給水すべく、移植の時期は花後二週間許の頃、新芽・新根の發生する時期を可とし、二三年に一回新しき材料を用ひて植替を行ふべし。

(A) シムビデューム (*Cymbidium*) は、地生蘭又は氣生蘭に屬し、擬球莖を有するものと否との別あり。原産地は本邦支那印度比律賓濠州亞弗利加等にして種類頗る多し。本邦にて古來鉢植又は盆栽として愛養し來れる春蘭建蘭素心蘭金稜邊等は何れもシムビデューム屬のものにして、本邦又は支那に自生し、耐寒性強きも、近年印度其の他の熱帶地方より輸入せられたるものは低温室又は中温室にて栽培す。

(イ) 金稜邊 一名チャウジュランは其の學名を *Cymbidium pumilum*, Rolfe. と稱し、古來栽培せらるゝ常緑の多年草にして、葉は地下莖より發生し狭長にして斜に垂下す。花は淡黄綠色にして紅紫色を帯び、穂狀をなして一花莖葉の基部の側方に抽出すに數多の花を着生す。開花期は五月頃にして品種甚だ多し。

圖四百二第



邊 枝 金

三〇

(ロ) 春蘭 一名ホクロは其の學名を *Cymbidium virens*, Lindl. と稱し、本邦處々の山地に自生し、又栽培せらるゝ常緑の多年草にして、文人畫などに見る蘭は即ち是れなり。葉は狭長にして粗剛の質を有し、花莖は葉叢の間に出て一花を着生す。花は淡黄綠色にして開花期は四月頃とす。品種甚だ多く、葉に種々の覆輪、縞、斑などあり、花色亦一ならず。

圖五十百二第



蘭 春

(ハ) 建蘭 一名ヲランは其の學名を *Cymbidium ensifolium*, Sw. と稱し、駿河其の他本邦暖地に自生する常緑の多年草にして、二三尺の高さに達し、稍々直立性なるも支柱を興へざれば亂れ易し。葉は狭長にして尖り、一簇一本の蘭に三四葉乃至六七葉を叢生す。花莖は夏季葉叢の間に生じ其の上部に五花乃至十花を着け、花色は淡綠黄にして唇瓣に紫色の斑點あり、芳香に富む。古來觀賞用として栽培せられ品種頗る多し。

(二) 寒蘭 は、其の學名を *Cymbidium kanran*, Makino と稱し、本邦處々の暖地に自生す。産地によりて葉花共に多少の相異を見るも概して葉は細長くして垂下し易し。花瓣は狭長にして香氣あり。花色は種々にして淡綠色を呈するものを青寒蘭と云ひ、紫色を帯びるものを紫寒蘭紅色の多きを紅寒蘭と稱す。開花期は十二月頃にして一花莖に數花を着くるを常とす。

(*) 玉鮎蘭 は、其の學名を *Cymbidium gyokuchin*, Makino. と稱し、支那より渡來せるものにして、葉は廣くして長く稍々垂下する性あり。秋季青白色の細き花莖を生じ雪白色の花を開く。芳香高くして蘭中の逸品たり。

(-) 素心蘭 は、其の學名を *Cymbidium Gyokuchin* var. *soshin*, Makino. と稱し、前者と等しく支那より渡來せるものにして、葉は前者よりも狭くして長し。秋季純白にして芳香の高級花を開くこと前者に

圖六十六百二第



蘭 鮎 玉

似たり。

(ト) 鳳蘭 は、其の學名を *Cymbidium simonsianum*, King. et Pautl. と稱し、葉は甚しく狭長にして垂下する性を有し、中央の葉脈のみ特に明瞭なり。花は白色にして、瓣心に紅紫の條斑を有して美麗なるも香氣に乏し。此の蘭は初冬に開花するを以て寒鳳蘭とも稱せらる。

前述せる本邦及び支那産の蘭類を繁殖するには分株によるを常とす。即ち之等の蘭は一籐(一本)より新しき一籐を生ずるに過ぎざるを以て、分株は適宜増殖したる後に於てせざるべからず。分株の時期は通例五月上旬頃にして、此の際鉢より採取りて全部を清水にて洗ひ、腐朽せる根などを切除き、健全なる根の絡み合へるものを丁寧に解き無理のなきやうに分株を行ふこと肝要なり。分株は二三年目に一回行ふを可とし、長く放置して根の腐敗を招くが如きことなからしむべし。分株せるものは腰高の樂燒鉢などに移植するを常とするものにして、黒樂鉢など賞用せらる。植込の法は消炭の粗粒(拇指大)を鉢底に入れたる後、小砂利交りの土を以て植込むものにして、其の土粒は下層ほど粗大なるも

のを用ふべし。植込の深さは鉢縁より一寸許低き位置に根元の存するを適當とす。かくて植込終れば水を十分に與へ、數日間日蔭の場處に置きたる後漸次日光に當つるを可とす。植込に用ふる土壤につきては、古來祕傳と稱して種々の配合法あれども、要は排水の良好なるやう工夫すべく、竹藪の黒土に赤土を混合したるものを米粒大乃至蠶豆大の數種に篩ひ分け(微塵粉を除き)之に花崗岩其の他の小砂利を混ぜるものなどを用ふるを可とす。一般に小砂利の多きものは乾燥し易くして夏季給水の勞多きも、土多きものの如く根腐病に罹るの虞なきものとす。灌水は日光に當てて用ふるを可とし酷暑中は特に灌水に注意するを肝要とす。肥料としては油粕の液肥などを稀釋して、春秋の間十日毎に一回位の割合にて與ふること多し。是れ培養土は一般に小砂利多くして肥料の流失大なるによる、尙ほ日照十分なれば發育旺盛なるも葉の雅致を損し、又日照惡しければ葉よく伸びて觀賞に可なるも、勢力弱くして新篠の發生不良なるを免れず。されば上等の蘭は葭簣などの下に置いて强光を避け、肥料も亦薄きものを用ふべく、斑入物などにおいて特に此の點に注意すること肝要なり。

又冬季は暖處に置き十分に日光を受けしめ、乾燥せるときは微温水を午前中に與ふべし。

第六十章 天竺葵

性状・類別

天竺葵、即ち花戸の所謂ゼラニウム(Geranium)は牻牛兒科ペラル



圖七十七百二第

天竺葵

ゴニウム(Pelargonium)屬の多年生草本にして、下部は灌木状をなし、春より秋末まで續々として開花し、温室又は暖地に於ては冬にても開花す。元來ペラルゴニウムの名稱は、希臘語のPelargos 即ち鶴より出でたるものにして、蓋し、其の果實の細長くして、鶴の嘴

に似たる所あるに基づくと云ふ。英語にて、此の花草をストークスビル(Stork's-bill)と稱するは、亦此に由來するものとす。葉は通例互生にして、其の形狀及び

色彩は種類によりて一ならず。花は通例繖形花序をなし、其の色には、種々の赤・白・紫等あり。ペラルゴニユームの多數は、喜望峰の原産にして、歐洲へは、今を去ること約三百年前に於て既に輸入せられたりと云ふ。元來此の屬には頗る多くの種あるのみならず、雜種の數亦頗る多し。現今本邦にて栽培せらるゝ天竺葵の主なるものを擧ぐれば、凡そ次の如し。

- (一) 紋天竺葵(英名 Zonal Pelargonium or Horseshoe Geranium) は其の學名を *Pelargonium zonale*, Willd. と稱し、莖は肉質多漿なるも、基部は較や硬化し、葉莖には多少の毛あるを常とす。葉は大抵心臟圓形にして、葉柄長く、葉縁に鈍鋸齒を有し、葉面に馬蹄形の斑紋あり。紋天竺葵の名蓋し之に因る。花は、一重又は八重にして、其の色には紅と白とあり。尙ほ此の種の天竺葵には、葉に黄色・白色・銅赤色等の斑紋又は覆輪を有するものあり、又狂咲(Cactus)などもありて、品種甚だ多し。
- (二) 天竺葵 は、其の學名を *Pelargonium inquinans*, Ait. と稱し、前種よりも多毛にして、葉面に馬蹄形の斑紋なし。花色は紅色を常とす。
- (三) 蔦葉天竺葵(英名 Ivy-leaved Geranium) とは、ペラルゴニユーム、ラテリベス(*P.*

latifolius, L'Her.) と稱する種に由來するものにして、其の葉の形、蔦に類するを以て、此の名あり。莖は少しく屈曲して二尺内外の長さに達す。花は長き花梗ありて繖形に排列す。花の色には紅・白等あり。

(四) 麝香天竺葵(英名 Scented-leaved Geranium) は、ペラルゴニユーム、グラヴェオレン



ヒフアクチンテバタツ 1
ヒフアクチンテナバホオ 2

ス(*P. graveolens*, L'Her.) 又はペラルゴニユーム、ラヅラ(*P. radula*, L'Her.) 等に由來するものにして、莖は木質狀をなし、葉は數箇に分裂して、芳香を有す。麝香天竺葵の名は、即ち此の芳香あるによるものにして、英名オーク、リーフ、セラニユーム(Oak-leaf Geranium) と稱するものは、葉形の櫟に類するものを云ひ、菊葉天竺葵と稱するものは、葉形の菊に似たるものを云ふ。花は何れも小にして、其の色彩も

亦艶麗ならざるものとす。

(五) 大花天竺葵 (Large-flowered Show and Fancy Pelargonium) は、主としてペラルゴニウム、グランデフロラム (P. grandiflorum, Willd.) に由来するものにして、花戸の間には、單にペラルゴニウムの名を以て知らる。葉は、大體に於て心臟圓形なるも、掌狀に分裂し、葉縁に鋭鋸齒あり。花は白色又は紅色を呈し、上方の二瓣は下方の三瓣よりも大にして、且つ其の中央に濃紫紅色の斑紋あり。

栽培法

天竺葵を繁殖するには、通例挿木の法を用ふれども、播種法によりても亦苗を仕立つることを得るものとす。但し播種法は、特に新品種を作らんとする場合に行はるゝを常とす。

挿木 は、温室にありては殆ど時季を選ばざるも、露地に於て挿木を行ふには夏秋の候に於てするを常とす。而して挿木法を行ふには、發育良好なる枝の先端二三寸をば莖節の直下より切取りて挿穂となし、一日許り日蔭の場處に置き、挿穂の切口を乾燥せしめたる後、鹿沼土又は川砂などを入れたる平鉢又は淺き箱に挿す(温室にては繁殖用の砂床に挿す)を常とす。此の際、床土の水分多き

に過ぐれば挿穂の腐敗を招く虞あるがゆゑに、床土は寧ろ乾き目なるを可とし、甚だしく乾燥するにあらずんば、妄りに灌水せざるを要す。此くて當初三四日間、日照をなすも、爾後は日照の強き時のみ日照をなし、日照の不足に陥らざるやうに注意するときは、早きは十餘日にして發根するがゆゑに、挿木後三四週間許にして徑三寸許りの小鉢に移植するをうべく、やがて其の鉢内に根の充滿するに至れば、徑五寸許りの鉢に移植して開花せしむ。培養土としては、畑土に腐葉土、川砂などを混じたるものを用ふるも、土質は膨軟に失することなく、肥料分も亦多きに過ぎざるを可とす。尙ほ此の花草は自然のまゝに放置することなく、二三寸の高さに摘心して分枝せしめ、各枝二三寸に伸長せば更に摘心するときは、枝數多く生じ、草丈低くして草姿丸味を帯び、鉢植として觀賞するに適するものとす。

肥料は、植付の際、堆肥、灰の類を施す外、補肥として油粕の液肥を用ふるも、其量多きに過ぎざるやう注意すべく、施肥多きに過ぐるときは莖葉徒長して花蕾の着生不良なるものとす。灌水も亦多きを忌み、鉢土は寧ろ乾き目なるを可とす。

其の他夏季日照の強烈なる間は、露地と温室内とを問はず、すべて日光の直射を受けざるやう注意すること肝要なり(但し、日光の直射を防ぐがため、空気の流通をも害するが如きことなきを要す)。又開花後は其の花を着けたる枝のまゝ切り去りて結實せしめざるときは、草勢旺盛にして、續々新芽を發生して開花するものとす。但し、新品種を得んがために播種法を行はんとする場合は例外とす。天竺葵は開花期間長くして而かも栽培容易なる花草なれども、耐寒性に乏しきは其の缺點とする所なり。即ち此の花草は伊豆の大嶋・熱海等の暖地にては露地にては越年し、南向の軒下などにあるものは冬季にも能く開花すると雖ども、東京以北の地にありては木框又は温室内に入れて越冬せしめざるべからず。尙ほ此の花草は毎春新しき培養土を以て植替を行ふのみならず、二三年後には株の更新を圖るを可とす。

第六十一章 フクシア

性状

フクシア (Fuchsia) は、柳葉菜科フクシア属(此の属名は、十六世紀の獨逸

大花天竺葵

フクシア、アルボレッセンス

紋天竺葵

萬葉天竺葵

フクシア、グロボーザ

フクシア、フルダンス



クモシマ、クモシマ

蜂天竺葵

クモシマ、クモシマ

クモシマ、クモシマ

藜藜天竺葵

大蘇天竺葵

植物學者フックスの記念のために命名せられたるものなり。の多年生草木又は矮性灌木にして數多の種を有し、多くは米國の原産なり。我國にてはツリウキサウなどと稱す。蓋し其の花蕾の形狀は恰も釣魚に用ふる浮子に類似するを以てなり。葉は通例對性にして、卵形、橢圓形又は披針形をなし、嫩莖、葉柄等多く紫紅色を帶ぶ。萼は普通筒狀にして、其の上方は四箇に分裂し、紅色、白色等を呈し、花瓣は紫色、紅色又は白色にして、兩蓋特に雌蓋は、通例、花の外に突出す。花は垂下して開くを普通とすれども、或る種 (*Fuchsia arborescens*, Sims.) にありては直立して開花す。開花期間は、概して長く、晩春より晩秋に及ぶ。

フクシアの主要なるもの數種を擧ぐれば次の如し。

(一) **フクシア、グロボーザ** (*F. globosa*, Lindl.) 此の種に屬するものは、萼の筒狀をなす部分は、四箇の裂片となれる部分よりも短し。又花瓣は通例紫色にして、萼の赤き裂片よりも短く、雌雄蓋殊に雌蓋は甚しく花瓣の外に突出す。

(二) **フクシア、フルゲンス** (*F. fulgens*, Moc.) 此の種に屬するものは、萼の筒狀をなす部分は裂片となれる部分よりも二三倍又は其の以上も長し。萼及び花瓣は

共に紅色にして先端尖り、雌蕊は僅に花外に突出す。

三六二

(三) フクシア、スペシオーザ (*F. speciosa*, Hort.) 此の種は、一名フクシア、ヒブリダ (*F. hybrida*, Hort.) と稱し、フクシア、グロボーザとフクシア、フルゲンスとの雜種によりて成れるものゝ如し。萼の筒状部と裂片部との長さは、通例略ぼ相等しとす。

(四) フクシア、アルボレッセンス (*F. arborescens*, Sims.) 此の種の特徴は、普通のフクシアの如く、其の花垂下せずして、直立するにあり。而して其の花は紫色を帯びたる桃色を呈するを常とす。

栽培法

フクシアを繁殖するには、挿木法を用ふるを通例とし、播種は新品種を育成するに用ひらる。挿木に用ふる枝は、花蕾を着けざるものを選び、之を川砂又は鹿沼土などを入れたる平鉢の中に挿し、日除をなして、乾燥せざるやう注意すれば、やがて根を發生するがゆゑに、此に於て一本づゝ小鉢に移して培養し、後大形の鉢に移すを可とす。移植の際、鉢の中に入るゝ土壤は、畑土に腐葉土、川砂などを混じて調製するを常とす。此の花草は水分を要すること多きが故に、時々灌水して、乾燥せざる様に注意すべく、補肥としては、油粕などの液肥を與ふ。

尙ほフクシアは天竺葵と等しく寒氣に堪ふるの力弱きが故に、温室又はフレームなどに入れて越冬せしむるを可とす。

第六十二章 ヘリオトロープ

性状

ヘリオトロープ (*Heliotrope*) は、紫草科ヘリオトロピウム (*Heliotropium*) 屬の多年生草本又は矮性灌木にして、數多の種を有するも、就中、最も普通に栽培せらるゝものは、ヘリオトロピウム、ベルグイアナム (*H. peruvianum*, L.) にして、英名をチェリー、パイ (*Cherry Pie*) と稱し、邦名をキダチルリサウと稱するもの是れなり。此の種は南米ペルーの原産にして、莖の基部は灌木状をなし、分枝すること多し。葉は互生にして卵状長橢圓形又は長卵形をなし、葉縁は鋸齒なく殆んど全縁にして、葉面に皺あり。莖葉共に毛を有す。花は小形の合瓣花冠にして先端五裂し、藍紫色又は白色を呈して枝頭に數多着生す。花に芳香あるを以て香水草とも云ふ。此の花草は、鉢植となして觀賞せられ、又切花として用ひらる。

栽培法

此の花草は耐寒性弱きを以て、冬は温室又はフレーム内に保つべく、

繁殖は挿木によるを例とす。之が栽培は一般に、天竺葵・フクシアなどに準じて可なり。

第六十三章 マーガレット

性状

マーガレット(Marguerite)は、一名パリス、デージー(Paris Daisy)と稱し、菊科に屬する矮性の半灌木にして、學名をクリサンセマム、フルテッセンス(Chrysanthemum frutescens, L.)邦名をモクシユンキクと云ふ。此の花草は其の高さ二三尺許に達し、葉は多く互生にして羽狀に細裂す。花は枝頭に一箇づゝ生じ、其の色白くして中心黄色を呈す。蓋し周囲の舌狀花冠は白色にして中央の筒狀花冠は黄色を呈するによる。

圖八十百二第



トツレガーマ

開花期間甚だ長くして春より晩秋に及び、花壇植鉢植となして觀賞するに適するのみならず、切花として需要せらるゝこと甚だ多し。

栽培法

マーガレットも亦花期甚だ長くして栽培容易なるがゆゑに、廣く觀賞の用に供せらるゝと雖ども耐寒性弱き缺點あり。されば、暖地の外は温室又はフレーム内に入れて越冬せしめざるべからず。温室内にては冬と雖ども能く開花するがゆゑに、特に切花用として冬間温室内にて培養することあり。此の場合には、温度を稍々高く保つゝの要あるも、單に越冬せしむる目的にて温室に入るゝ場合には、寒害の虞なき限り温度低くして可なり。此くて温室又はフレーム内にて越年せしめたるものは、翌春降霜の虞なきに至りて露地に移すものとす。繁殖は挿木法によるを常とし、露地には夏秋の候に行ふも、温室内にては、隨時之を行ふを得べし。要するに之が栽培は大體に於て、天竺葵・フクシア等と異なることなし。

第六十四章 ランタナ

性状 ランタナ (*Lantana*) は、馬鞭草科ランタナ属の多年生草本又は灌木にして、数多の種あるも、就中、最も普通に栽培せらるゝものはランタナ、カマラ (*Lantana camara, L.*) なり。此の種は熱帯亞米利加の原産にして、葉は卵形をなして尖り、葉縁に鋸齒あり。莖は基部木質にして硬く、葉腋より發生する枝頭に美女櫻に似たる小形の花を數多着生す。花の色は始め黄色なるも、漸次に紅色を帯び終に紅色に變ず。此く開花中花色は種々に變化するを以て七變化の名あり。花壇に植込む外鉢植となして觀賞するに宜しく、温室内の裝飾にも用ひらる。

栽培法 ランタナも亦前數種の花弁と等しく耐寒性弱きがゆゑに、暖地の外は温室又は木框内にて越冬せしむるものとす。而して之が繁殖には挿木法を用ひ、露地にては六月頃より九月頃に於て之を行ふ、温室にては其の他の時期にも行ふ。其の法は發育良好なる新梢を二三寸に切りて、細砂を盛れる挿木床又は平鉢に挿すものにして、天竺葵・フクシア・ヘリオトロップ等に於けると異なるなし。又冬期ランタナを入れ置く温室は華氏五十度位を保ち得れば足るべく、其の間灌水は極少量に止め、成るべく午前中に與ふべし。斯くて翌春霜害の虞

マーガレット

クフエア

ヘリオトロップ

ランタナ



トクシク

トクシク

トクシク

トクシク

なきに至れば室外に出して可なり。而して鉢植のものは、室外に出すと同時に、枝を剪りととのへ、灌水を漸次に多くし、補肥をも適宜與ふべし。

第六十五章 クフエア

性状 クフエア (*Cuphea*) は、千屈菜科クフエア属の多年生草本又は灌木(一二年生草本もあり)にして、種の數甚だ多きも、就中、普通に栽培せらるゝものは次の數種とす。

(一) **クフエア、イグネア** (*Cuphea ignea*, Dc.) 此の種は北米メキシコ産の多年生草本にして最も普通に栽培せられ、莖は一尺内外に達し、莖の基部は木質なり。葉は平滑にして廣披針形をなし、全邊にして對生す。花は葉腋に一箇づゝ生じ、花瓣を缺く。萼は筒狀にして紅色を呈し、縁部は黒色及び白色を帯び、先端僅に六裂す。夏秋の候續々開花す。

(二) **クフエア、シヤネア** (*Cuphea cyanea*, Moc. & Sesse.) 此の種は南米アンデスの原産にして莖は二尺位に達し、葉は稍々心臟形をなして對生す。花は萼の外に二

筒の瓣あり。萼は基部紅色にして上部は黄色を呈し、花瓣は紫青色なり。萼及び枝梢に毛ありて粘氣を帯ぶ。開花期は略ぼ前種に等し。

(三)クフエア、ヴァイコシツシマ (*Cuphea viscosissima*, Jacq.) 此の種は北米原産の一二年草にして一二尺の高さに伸長し、粘氣ある毛を密生す。故にネバリクフエアなどと稱せらる。葉は長卵形全邊にして對生し、花は紫紅色の不整齊花冠と下部の膨大せる長き萼とを有す。クフエア中粘氣最も強きものとす。

此の外にクフエア、フツケリアナ (*C. Hookeriana*, Walp.)、クフエア、ミニアタ (*C. miniata*, Brongn.) 等も亦栽培せらる。

栽培法 クフエアは耐寒性弱きを以て、暖地の外はフレーム又は低温度の温室内に入れて越冬せしむ。繁殖は挿木によるを便とし、其の法、天竺葵・クシア等に準ず。栽培概して容易なり。クフエア、イグネアの如きは、矮性にして、花壇の縁植などとなすに好適するものとす。

第三篇 草木類

第一章 牡丹

性状

牡丹(英名 Tree Peony)は其の學名を *Paeonia Moutan*, Air. と稱し、毛茛科に屬する落葉性灌木にして、高さは通例二三尺なるも、老木には五六尺乃至丈餘に達するものあり。葉は通例二回羽



圖九百二十第

牡丹

状複葉にして、互生し、小葉は多く淡綠色にして多少深裂し、且つ缺刻を有す。花は五月頃枝頭に開き、元來單瓣の小輪なりしも、改良の結果瓣數著しく増加して八重咲・千重咲となり更に盛上咲と稱し、花心の露出せざるものを生ずるに至れり。花輪も亦随つて著しく大形となり、其の色彩に

も、白・淡紅・紅・濃紅・紅紫・黒紫・絞等種々あり。根は肉質肥大にして、多くの養分を貯藏し、翌春の發育開花に資すること大なるのみならず、古來藥用に供せらるゝものとす。

來歴 牡丹は支那の原産にして、其の本邦に傳來したる年代は詳ならざるも、牡丹にフカミグサの名あるは渤海をフカミと稱するによるものにして、蓋し渤海の使節によりて傳へられたるがためなりとの説あり。抑も渤海の使節始めて本邦に來れるは今を去ること千二百餘年前にして、渤海の亡べるは千餘年前なるがゆゑに、此の説に従ふときは、牡丹の本邦に傳はれる年代は今を去ること少くも千餘年の昔なりと云ふをうべし。崇徳天皇の御宇關白太政大臣藤原忠通の歌に、咲しよりちりはつるまで見しほどに花のもとにてはつかへにけり」とあるは唐の白樂天の詩(牡丹芳)中に、花開花落二十日、一城之人皆如狂」とあるを譯せるものにして、牡丹に二十日草の名あるは亦之に基づくものとす。又新古今集に太宰大貳重家がよめる、形見とて見れば歎のふかみぐさ何なか／＼のにはほひなるらむの歌あり。此の歌には、六條攝政かくれ待りて後植ゑ置き待りける

牡丹の咲きて待りけるを折りて女房のもとより遣はして待りければとありて、當時牡丹の栽培せられたることを知るに足るべし。

本邦にては中古牡丹を好愛せしことは榮花物語枕草紙等によりて見るも明かなるも、其の栽培隆盛を極めたるは元祿時代にして、同六年版の地錦抄には白牡丹百七十二品、紅牡丹百六十一品を收むるを見ても亦其の一斑を知るべし。要するに牡丹は、其の輸入せられたる當初は主として其の根を藥用に供したるも、其の花艶麗にして觀賞に可なるがため、遂に花卉として貴重せられ、却て原產地よりも優秀なるものを産するに至れるのみならず、近年之が苗木の海外に輸出する額頗る多し。攝津國池田地方は古來牡丹苗の産出を以つて著名なりしが、越後國蒲原地方も亦近年牡丹苗の産地として名聲を博するに至れり。又牡丹園は本邦處々に存するも、就中著名なるは福島縣須賀川の牡丹園なりとす。

栽培法

牡丹は炎熱多濕を忌むも、寒氣に堪ふる力割合に強き性あり。之を繁殖するには、接木の法を用ふるを常とするも、又播種によりて繁殖することあり。播種は新品種を育成する外、接木用の砧木を多量に生産せんがために行は

るゝものにして、其の方法は芍薬に等しく、播種後六七年にして始めて開花す。實生苗は此く開花すること遅きを以て、早く開花せしめんがため、播種後三四年の秋、他の砧木に接木することあり。然るときは、大抵翌年又は其の翌年に開花するものとす。

接木 は通例九月頃に行ふものにして、其の適期は地方によりて多少の遅速あるものとす。砧木には従來地牡丹と稱し、紫紅色單瓣の小花を開く劣等の牡丹を用ひたりしが、近年新潟縣にては芍薬の根を砧木として用ふるに至れり。芍薬砧の牡丹は牡丹砧のものに比して、苗木の發育は遅緩なるも、砧芽の生ずることなく、且つ根の伸長少くして鉢植となすに便なり。又砧木に供する牡丹及び芍薬は何れも實生のものを用ふること多し。而して接木の方法は切接によるを常とし、接穂としては其の年に發育せる強健なる新梢を用ひ、一二芽をつけて切取るものとす。接木終れば畑に植付け、挿穂の上に土を被ふて越冬せしめ、翌春其の被土を除きて芽を地上に露出せしむべし。然るときは芽は漸次に伸長し、牡丹砧の發育良好なるものは其の年内に於て枝頭に花蕾を生ずるに至る

ものとす。但し苗木の發育を圖るがためには、此の花蕾を切取りて開花せしめざるを可とす。

牡丹苗の植付には花壇植と鉢植とあり。花壇は日當り良好にして且つ通風の佳良なる位置に設くるを可とするも、風當り強き高臺などにありては適宜防風の設備あるを要す。又牡丹は乾濕適度の地を好むも、特に過濕は最も有害にして根の腐敗を招き易きがゆゑに、濕地にありては適宜排水の方法を施すべく、花壇も亦稍々高く設くるを要す。之に反して乾燥し易き地にありては、腐熟せる堆肥など保水力の強きものを稍々多く施し、且つ灌水に注意すること肝要なり。花壇は幅四尺位を通例とし、之に三尺内外の間隔を以て苗の根張に相應せる植穴を掘り、よく腐熟せる堆肥(此の堆肥には、豫め少し許りの油粕、魚肥、灰などを混じて腐熟せしめ置くを可とす)などを十分に入れてよく土壤と混和したる後に苗を一本づゝ植付くべく、植付の深さは接目の一二寸も地下に隠るゝ程度を可とす。尚ほ此の際、接合部を纏絡したる棕櫚繩などを切去るべし。元來牡丹は移植を好まざるものにして、移植の翌年は花蕾を着くること少きがゆゑに、

植付の際には株間を稍々廣くするを可とす。(但し根を傷つけざるやう丁寧に掘取るときは、老木と雖ども移植し得ざるにあらず)。植付の時期は十月上旬頃を通例とす。

苗木植付後の手入としては、早春芽出し肥として稀薄なる液肥を施すべく、又牡丹砧などの苗木にありては砧木より發芽するものあるがゆゑに、成るべく早く除去することに注意すべし。而して早春發生せる新梢の頂に生ぜる花蕾綻び始むる頃に至れば、篠竹などを立て、倒れざるやうに保護し、且つ開花中は風雨日光に當てざるやう油紙障子を以て屋根を造るべし。やがて開花終れば花下二三枚の葉と共に枝の上部を切去りて結實せしめざるやうにすべし。但し種子を採收せんとするものは固より例外とす。此くするときは、其の枝の残部はよく充實して、之に存する腋芽は膨大し、翌春伸長して開花するを見るべし。尙ほ此の際、小枝の多きものは適宜剪枝を行ひて通風をよくし、且つ藥劑を撒布して病害豫防をなすを可とす。而して落花後より七八月頃までの間に二三回液肥を施して新梢の充實を圖るべく、液肥としては下肥の腐熟せるものを稀釋

して用ふるか又は油粕・魚肥等の粉末を水に入れて腐熟せしめ、其の上澄を稀釋して用ふるを可とす。其の他夏季には根元に藁刈草などを敷きて乾燥を防ぐべく、又灌水に注意すべし。概して牡丹は灌水の多きを忌むも、暑中は十分に灌水すべく、夏季乾燥甚だしきときは落葉を早め新梢の充實を缺くがため、翌年の開花不良となるの虞あり。やがて秋に入り葉の落下するに至れば落葉を集めて焼却すべく、又晩秋の頃堆肥に油粕・魚肥・灰などを適宜混合したるものを翌年の基肥として施すべし。尙ほ寒地にありては初冬の頃、根元に藁などを敷きて防寒の料となすを可とす。(根元に馬糞の乾燥せるものなどを被ふは、防寒の目的を達すると共に其の腐熟によりて養分を供給するの効あり)

牡丹は落花後に花枝の剪定を行ふこと既に述べたるが如し。尙ほ牡丹は秋に剪定を行ふて、樹形を整ふると共に花枝の養成を圖らざるべからず。其の方法は先づ枯枝を剪除し、懐枝も適宜剪除すべく、枝の少き部分は比較的細き枝も之を残し置くべし。而して牡丹の花芽翌春伸びて花枝となるものは秋季には膨大し、葉芽と容易に區別しうるがゆゑに、花芽の數箇着生せる枝は基部の花芽

一箇を残して剪定するを常とするも、其の附近に枝の存すること少き場合には二三の花芽を残して剪定することあり。然るときは上部の花芽は伸びて開花するも、其の下方にある花芽は上部の花枝に勢力を奪はれて開花せざること多きを以て、此の枝は二三芽を残して剪定し以て肥大せる枝を發生せしめ、各枝に花芽を着生せしむべし。尚ほ牡丹の枝は髓太くして腐敗し易きがゆゑに、剪定の際には芽の直上部より切ることなく、芽の上方五六分餘を残して剪除するを可とす。

牡丹は花壇植となす外、鉢植となすことあり。鉢植となすには直徑一尺以上の鉢を用ひ、先づ鉢の破片などにて底孔を塞ぎ、木炭の破片などを少しく入れて排水を便にしたる後、荒木田に腐熟せる堆肥及び川砂などを混じて調製せる培養土を入れ、花壇植に於けるが如き基肥を施して、苗木の接目五六分許り埋まるやうに植付け十分に灌水すべし。此の際牡丹砧に接木したるものは、其の根長大にして折れ易きがゆゑに、數時間日光にさらし柔軟ならしめたる後、鉢内に入るゝを可とす。かくて冬の間は鉢をば日當りよき畑に埋め、鉢の上に一寸位土

を被ふほどに埋む、其の上に藁などを敷きて防寒すべく、翌春に至れば堀り出して稀薄なる液肥を與へ又灌水に注意するとき、花芽は伸長して開花するに至るものとす(牡丹の苗には花芽二箇許りあるを常とす)。爾後の手入は花壇植のものに準じて可なり。

又鉢植牡丹の開花促進をなすには、一二回霜に當てたる後液肥を施して温室に入るべく、室内の温度は當初五十五度許りとなし、六十度より六十五度又は七十度許りまで温度を高むるものとす。此の際注意すべきは、芽の伸長する前に根の發育を盛ならしむることにして、恰もチユーリップなどの開花促進の場合に似たるものあり(鉢植牡丹の地上部を新聞紙などにて包み温室内に入るゝは良法と云ふべし)。此くして温室内にて開花せしめたるものは、之を普通の室内に移して觀賞するときは、温度高からざるがため花もち良好なるを常とす。

第二章 躑躅類

性状

躑躅類は石楠科ロドデンドロン (Rhododendron) 屬の灌木にして、其の種

類頗る多く、本邦處々の山野に自生するもの少からず。多くは常緑性なるも、レングヅ、ジなどの如く落葉性のものもあり。葉形は種類によりて多少の相違あるも、倒卵形、橢圓形、披針形等をなすもの多く、花は五裂し、漏斗状又は鐘状をなして開くも、サツキの采咲などに見るが如く細裂せるものもあり。花色は、紅、白、紫、黄、橙等種類によりて種々あり。概して稍々日蔭に堪ふるの性あるを以て、往々喬木性庭樹の下などに植込むがために用ひらるゝことあり。されど優良の品種は鉢植となして觀賞するを常とし、又往々花壇植にも用ふることあり。開花期は四五月頃を常とするも、サツキの如きは六月頃に開花す。

類別

躑躅類中、園藝上重要なるものを擧ぐれば大略次の如し。

(一) **キリシマ**(霧嶋又石巖) は、其の學名を *Rhododendron obtusum*, Planch. と稱し、常緑性の灌木にして、庭園又は鉢に植ゑて觀賞すること多く、九州地方の野生種に由来するものゝ如し。葉形は品種によりて多少の相違あるも、通例倒卵形をなして、花は四五月頃梢頭に簇開す。花形漏斗状をなし、花色種々あるも、紅色を通例とす。東京地方に多く栽培せらるゝ日の出霧嶋は鮮紅色を呈して開花早

し。又久留米躑躅と稱するもの

は即ちキリシマにして、天保年間久留米藩の坂本元藏と云へる人始めてキリシマの實生繁殖を試みたる以來大に改良せられたるものなり。久留米躑躅には品種甚だ多く、花の大小、色彩、咲方等種々あり。今先づ花の咲方につきて述べれば大略次の如し。

圖十二百二第



久留米ツツジ

(イ) 猪口咲 とは、花瓣濶大にして筒部稍々短く、瓣端圓くして猪口形をなすものを云ふ。

(ロ) 劍咲 とは、花瓣狭長にして筒部長く、瓣端尖りて劍狀をなすものを云ふ。

(ハ) 並咲 とは、以上二種の中間に位する咲方を云ふ。

(ニ) 二重咲 とは、花瓣重なりて内瓣と外瓣との二層あるものを云ふ。猪口咲、

劍咲・並咲には何れも一重咲と二重咲とあり。

(*) 蓑咲 とは、二重咲の一種なるも、外瓣の伸長不良にして、且つ其の瓣端細裂し、内瓣の周圍に蓑をかけたるが如き狀をなす咲方を云ひ、多くは下等品なり。猪口咲・劍咲・並咲の何れにも此の種の咲方ありとす。

(-) 一本咲(一本真) とは、雄蕊の發育不良にして花底に隠れ、一箇の雌蕊のみ良く發育するものを云ふ。一重咲に多きものとす。

此の如く、花の咲方に種々あるのみならず、花の色に濃淡種々の紅紫の外、白・底白・底紅・絞咲分等種々ありて、色彩頗る豊富なり。概して此の躑躅は、花形小なるも、花の着生密なるがため、花時頗る美觀ありとす。

圖一十二百二第



キ ツ サ

(二) サツキ(早月又杜鵑花) は、其

圖二十二百二第



咲 采

の後に開花するものにして、花形前種よりも稍々大なるのみならず、枝葉に黒褐色の毛を有し、葉端少しく尖れるを常とす。元來此の種は本邦の原産にして、紅色の花を開き、中部地方の河岸などに自生すること多きも古くより栽培せられ、枝變り・實生などによりて多くの品種を生せるものとす。即ち現今栽培せらるる早月の花には種々の紅色の外、白・底白・絞咲分等ありて咲分著しく多く、又一重咲の外、八重咲・采咲などあり。葉にも亦大小の別あるのみならず、葉端丸味を帶

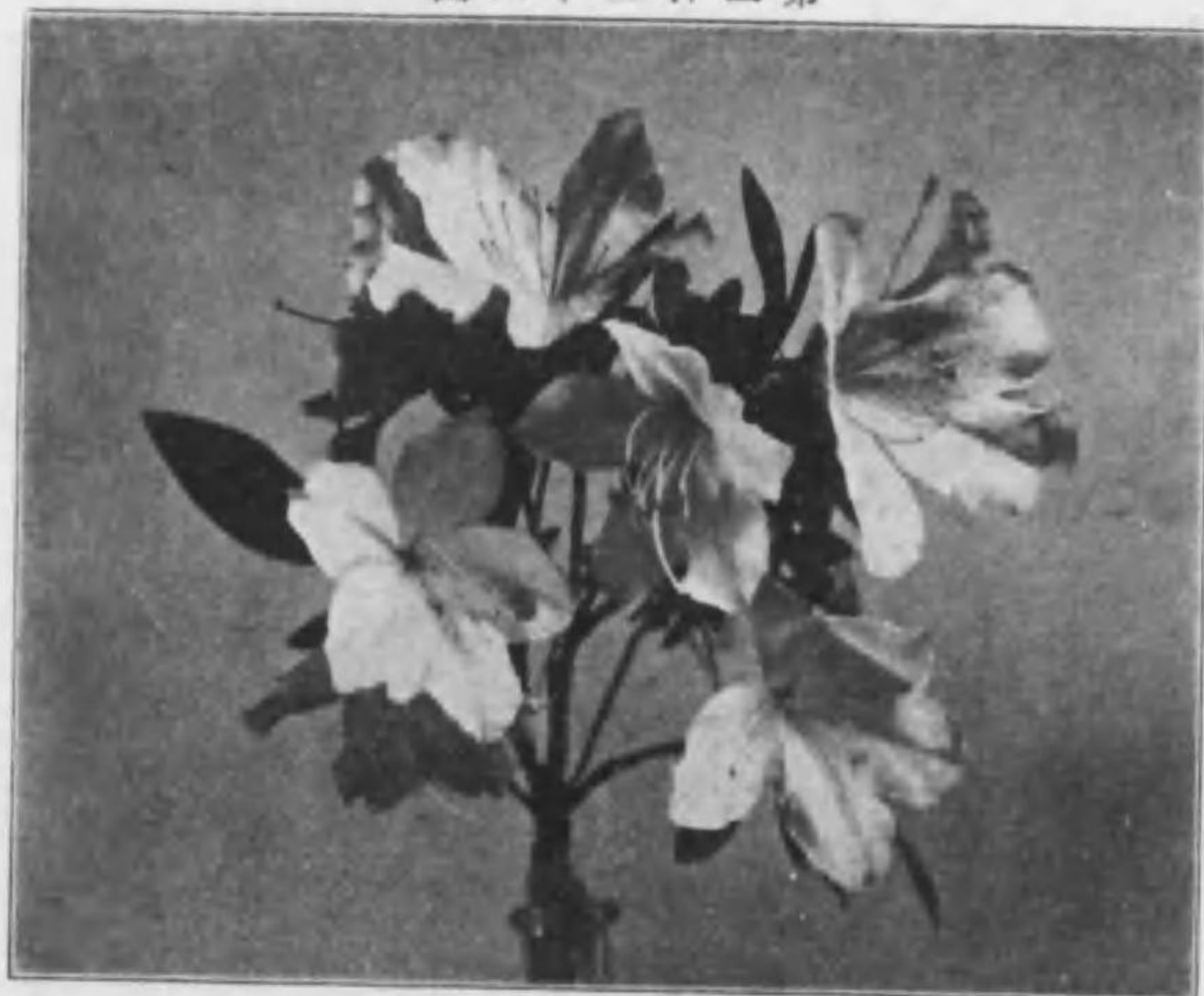
の學名を *Rhododendron lateritium*, Planch. と稱し、前種に似たる常緑性灌木なるも、躑躅類中最も晩く開花するものにして、其の開花期は恰も舊曆五月の頃なるを以てサツキの名あり。尙ほ此の種は前種(開花後に新葉を發生す)と異なりて新葉發生

ぶるものあり。躑躅類中現今最も多く栽培せらるゝは本種なりとす。

(三) リウキウツ、ジ(琉球躑躅) は、其の學名を *Rhododendron macronatum*, G. Don. と稱し、常緑性の灌木にして分枝性に富み庭園に栽培せらるゝこと多し。葉は披針形にして枝葉に細毛を被むり、花は白色にして淡黄緑色の斑紋を有し、葉、花共に前兩種よりも大なり。此の種の原産地は不明なるも、支那地方より琉球を経て傳來したるものなるが如し。開花期は四五月頃とす。

(四) オホムラサキ(大紫) は、其の學名を *Rhododendron pulchrum*, Sweet. と稱し、常緑性の灌木にして分枝性に富み、庭園に多く栽培せらるゝことリウキウツ、ジに

圖三十二百二第



球 琉(下)紫 大(上)

等し。葉は狭長橢圓形にして毛を有し、前種よりも大形にして枝頭に簇生す。花は大形にして二三箇づゝ生じ紅紫色を呈す。此の種も亦其の原産地不明なるも、リウキウツ、ジと近縁あるものの如し。開花期は五月頃とす。

(五) ヨドガハツ、ジ(淀川躑躅) は、其の學名を *Rhododendron yedoense*, Maxim. と稱し、古くより庭園に栽培せらる。葉は披針形又は橢圓狀披針形にして兩端狭く、淡綠色を呈し、花は重瓣の大輪にして紅紫色を呈し、枝頭に簇生して頗る艶麗なり。牡丹躑躅とも稱せらる。開花期は四五月頃とす。

圖四十二百二第



ジ、ツ川淀

(六) レンゲツ、ジ(羊躑躅) は、其の學名を *Rhododendron japonicum*, Swing. と稱し、本邦處々の山野に自生する落葉性灌木なるも、往々庭園に栽培せらる。葉は倒長卵形又は長橢圓形をなして毛あり。花は數箇簇生し、花色に黄樺、紅等あり。元來此の躑躅は秋に落葉し、花期には僅

に發芽するも、葉の伸長は主として落花後に行はるゝものにして、花葉共に有毒なれば注意すべし。

(七) アザレア (Azalea) とは、白耳其、和蘭などに多く栽培せらるゝものにして、俗

に西洋躑躅などと稱するも、元來本邦產のサツキの如き躑躅を支那より輸入して改良したる常綠灌木にして、冬間温室にて培養するに適す。花は大にして甚だ艶麗なり。今其の來歴につきて略述すれば次の如し。

アザレアの原種は西歷千六百八十年の頃始めて支那より和蘭に輸入せられしが、何時しか其の跡を絶つに至れるを以て、千八百三十年の頃ダニエルス (Daniels) が同じく支那より英國に向つて此の種の輸入を

圖五十二百二第



アザレア

試み、キングスロードの育種家ナイト (Knight) 之を購入せしが、之には五品種ありしと云ふ。爾後十餘年の間、英、佛、白耳其、和蘭等に於ては専ら接木、壓條等によりて支那產の諸品種を繁殖せしが、實生によりて新品種を育成する方法は千八百四十三年にヴィタタム (Vittatum) と稱する品種の輸入に始まると云ふ。かくて實生繁殖の行はるゝや新品種續々として生ぜしが、就中多數の良品種を生産せるは白耳其にして、同國ガン (英名 Ghent) のヴェルヴェーヌ (M. J. Vervaeene) の如きはアザレア育種家の泰斗にして、同氏の育成せる良品種中ヴェルヴェーヌ (Vervaeiana) ・ヴェルヴェーニアナ、アルバ (Vervaeiana alba) の如きは何れも枝變りを利用して育成せるものなりと云ふ。

歐洲には右に述べたるアザレアの外にゲント、アザレア (Ghent Azalea) と稱するものあり。小亞細亞產のアザレア、ポンチカ (Azalea pontica) と稱する黄花種に種々の米國種 (American Azalea) を交配して育成せるものなりと云ふ。此のアザレアは本邦產のレンゲツ、ジの如き落葉灌木にして、白耳其のガンに於て繁殖せられ各國に輸出す。其の繁殖法は實生苗を砧木として之に處要の品種を接木

するにありとす。此の外、本邦のレンゲツ、ジも亦白耳其に於て栽培せられ、實生繁殖によりて改良せられたり。

以上の外本邦に栽培せらるゝ躑躅類には若鷺^{ワカサギ}淡紫紅色大輪の花を開き、東京附近にて庭園に栽培すること多し、黒船躑躅^{クワン}朝鮮の産にして古く本邦に輸入せられ、葉は大なる倒卵形にして輪生し、淡紅色大輪の花三四箇集りて開く、藤万葉^{フジマン}葉は披針形にして枝頭に簇生し、淡紫紅色の重瓣花を開くも、白色の重瓣花を開くものもあり、手牡丹^{テマダン}葉は橢圓形又は披針形にして、淡紫色の重瓣花を開くなどあり。其の他五葉躑躅^{イロハ}葉は橢圓形にして五箇づゝ生じ白色の花を開く、山躑躅^{ヤマ}葉は長卵形にして尖り毛を有し、紅色の花を開くを通例とす、鶴躑躅^{ツル}葉形山躑躅に似て淡紫紅色の花を開き、夢には腺毛ありて粘着す、雲前躑躅^{クモノ}躑躅類中葉形最も小なるものにして淡紫紅色の小花を開くも、白色の花を開くものあり、三葉躑躅^{サン}開花最も早くして淡紫花を開き、葉は花後に出で枝端に三箇づゝ生ず。故に此の名あり、紫八汐躑躅^{ムラサキ}本邦北部の山地に自生する落葉性灌木にして紫色の花は葉と共に枝頭に生ず等躑躅類に屬するもの頗る多し。

●新梢を掻き取りて挿すものにして、當初數日は風の日間は風の當らざる薄暗き處に置くべく、爾後強き日照を避くべし

繁殖

躑躅類を繁殖するには挿木の法によるを普通とし、其時期は、梅雨中を以て最適期となすが如し。其の挿木には箱挿、鉢挿、床挿などの別あり。サツキの如きは、鹿沼土と水苔との混和せるものを用ひて、箱挿となすを常とす。一般に挿木には、鹿沼土其の他排水よき土壌を用ふべく、日除と灌水とに注意すべし。躑躅は、又、接木法、分株法、播種法等によりて繁殖することあり。接木は、主として誘接法によるものにして、其期節は、大抵五六月頃を可とし、活着せるものは翌春發芽前に切り離すものとす。分株は、五六月頃分取せんとする枝の基部に切傷を附け置くとときは、やがて發根するを以て、此に於て分割して移植すべし。時に母株の根元に發生せる枝條中、既に自ら發根せるものあり。此の如きは、直に分取して移植するを得べし。播種は、新品種の育成又は砧木の養成に用ひられ、現今の良品種は、此の法によりて得たるもの多し。

植付

躑躅類の植付は、秋又は春に於てすることあるも、落花後直に行ふを可とす。植付の際は、根を切り縮め、且つ枝條をも適宜剪定すべし。而して躑躅類は庭園・花壇などに植付くも、鉢植となして觀賞する場合甚だ多く、特に良品種

●老樹には
壤土を主と
し、之に鹿
沼土と水苔
とを混する
を可とす

に於て然りとす。鉢植となすには最初より大鉢を用ふることなく順次に大なる鉢に移すべく、其の培養土としては腐植に富める壤土などを可とするも、早月は鹿沼土に水苔を混ぜるものを用ふるを常とす。而して、躑躅類は、其の性、強光の直射を忌むがゆゑに、庭園又は花壇に植付くる場合には、稍々日蔭の地を選ぶべく、鉢植は葭簾などにて夏間の強光を遮るやうにすべし。尙ほ鉢植せるものには、冬季霜除をなすを可とす。

三八八

施肥其の他の手入

躑躅類の肥料としては、油粕・魚肥・骨粉などの液肥を適宜稀釋して用ふるも、油粕・骨粉などを粉末のままにて施し置き、灌水の際、其の養分を土中に滲入せしめて根を養ふも亦、良法にして、近年早月の施肥には、此の法を用ふるもの多きが如し。尙ほ施肥は、春秋の間に、適宜數回行ふを可とす。

躑躅類の樹姿は自然の儘に放任することあれども、鉢植となせるものは、適宜剪定して樹姿を整ふるを常とす。又美大の花を開かしめんとするには、適宜花蕾を間引くべく、やがて花蕾の綻び始むるに至れば、徐に枝條を動かして、枯葉鱗片などを脱落せしめて、之を除去すべし。而して鉢植となせるものは、開花期中、

棚の上に配置し、其棚の兩側と後方とは、簾にて圍み、天井には油障子などをかけて雨害を防ぎ、兼ねて日光の直射を遮るべし。已にして花色衰へ、花瓣の脱落するに至れば、花を摘除して、結實せしめざるやうにすべし。但し、實生繁殖を行はんとするものゝ摘花すべからざるは勿論とす。斯くて摘花し終れば、鉢植せるものは、植替を行ふべく、其の法、先づ鉢より抜きて、適宜根を刈り込み、且つ之と同時、枝梢の剪定をなして植付くべし。此の際用ふる鉢は、根を容れたる際、根の周圍に少許の間隔を存するほど大なるものなるべく、根と鉢と密接するときは、夏季鉢の熱せらるゝ際、其の影響を受けて根の害せらるゝ虞あり。鉢内に入るゝ土壤は、前きに述べたるが如し。

第三章 薔 薇

性 状

薔薇 (Rose) は、薔薇科ローザ (Rosa) 屬の灌木にして、高さは通例數尺に過ぎざるも、木香花ナニハイバラ (ハトヤイバラ) などの如く、長く伸びて蔓性をなすものあり。葉は奇數羽狀複葉にして、托葉を有し、小葉の縁邊に鋸齒あるを常

三八九

第百二十六圖



薔薇

鉢植及び花壇植として觀賞するに可なるのみならず、切花として需要せらるゝこと甚だ多し。

類別 薔薇には其の種類極めて多く、本邦に自生するもの少からず。今先づ薔薇屬 (*Rosa*) の主要なる種名を擧ぐれば、凡そ次の如し。

(一) **ローザ・ムルチフロラ** (*R. multiflora*, Thunb.) 此の種は本邦及び支那の原産にして、邦名ノ**バラ**(野薔薇)又ノイバラと稱し、落葉性の灌木なり。枝は稍々蔓状を

とす。花は多く五六月頃に開くも、四季咲と稱し、晩春より秋に亙りて續々開花するものあり。花は單瓣又は重瓣にして、白・黄・淡紅・紅・黒紅等種々の色彩を有し、且つ多くは芳香に富み、枝頭に一箇づゝ咲くものと數箇集りて咲くもの(房咲)とあり。

なして刺あり。高さは通例四五尺なるも、頗る長く蔓延することあり。葉は奇數羽狀複葉にして、通例五箇又は七箇の小葉より成る。小葉は橢圓形又は倒卵形にして縁邊に鋸齒あり。花は六月頃枝頭に數多發生し、其の色白くして、五箇の花瓣を有し、芳香あり。此の種の變種には、紅色の花を開くものあり。

(二) **ローザ・バンクシエー** (*R. Banksiae*, R. Br.) 此の種は英名を**バンクス・ローズ** (*Banks' Rose*) と稱し、我國にて**木香花**と稱するもの是なり。木香花は支那の原産にして、莖は蔓状をなし、往々二丈許りの長さに達し、枝幹に刺なし。葉は通例三箇乃至五箇の小葉より成り、小葉の形は先端鋭き橢圓形にして、葉縁に細鋸齒あり。花は五六月頃枝頭に數箇づゝ集りて生じ、稍々繖形、其の色は黄(黄木香)又は白(白木香)にして、後者には香氣あり。

(三) **ローザ・ミクロフィラ** (*R. microphylla*, Roxb.) 此の種は本邦及び支那の原産にして、邦名を**サンセイイバラ**と云ひ、落葉性の灌木なり。莖は高さ通例五六尺にして、多く分枝し、刺多し。葉は多數の小葉より成れる奇數羽狀複葉にして、小葉は橢圓形をなして、尖り、葉縁に鋸齒ありて、葉形山椒に類似す。花は淡紅色にし

て往々單生し、萼に刺毛を密生す。花期は六月頃とす。彼の十六夜薔薇と稱するものは、本種の變種にして、花瓣數多重なりて美大なるも、常に其の花輪の一方に缺所あるを以て十六夜の月に見立て、此く名づけられたるものとす。

(四) **ローザ、アシキユラリス** (*R. acicularis*, Lindl.) 此の種は本邦の山地に自生する落葉灌木にして、邦名を**タカネバラ**(高根薔薇)と云ふ(日本アルプスなどの高山に産す)。莖は低くして刺密生し、葉は三箇乃至七箇の小葉より成り、小葉は橢圓形にして鋸齒著しく、花は單生にして紅色を呈し芳香あり。萼片全縁にして且つ殆ど平滑なり。花期は五六月頃とす。

(五) **ローザ、ルゴザ** (*R. rugosa*, Thunb.) 此の種は邦名を**ハマナス**(玫瑰)と稱し、本邦及び支那原産の落葉灌木にして、本邦北部の海岸に自生す。莖は直立して三四尺の高さに達し、刺を密生す。葉は五箇乃至九箇の小葉より成り、小葉は橢圓形にして、表面暗綠色を呈し光澤に富み、裏面に絨毛を密生す。花は通例紅色單瓣なるも、白色のもの重瓣のものなどあり。五六月頃に開花す。

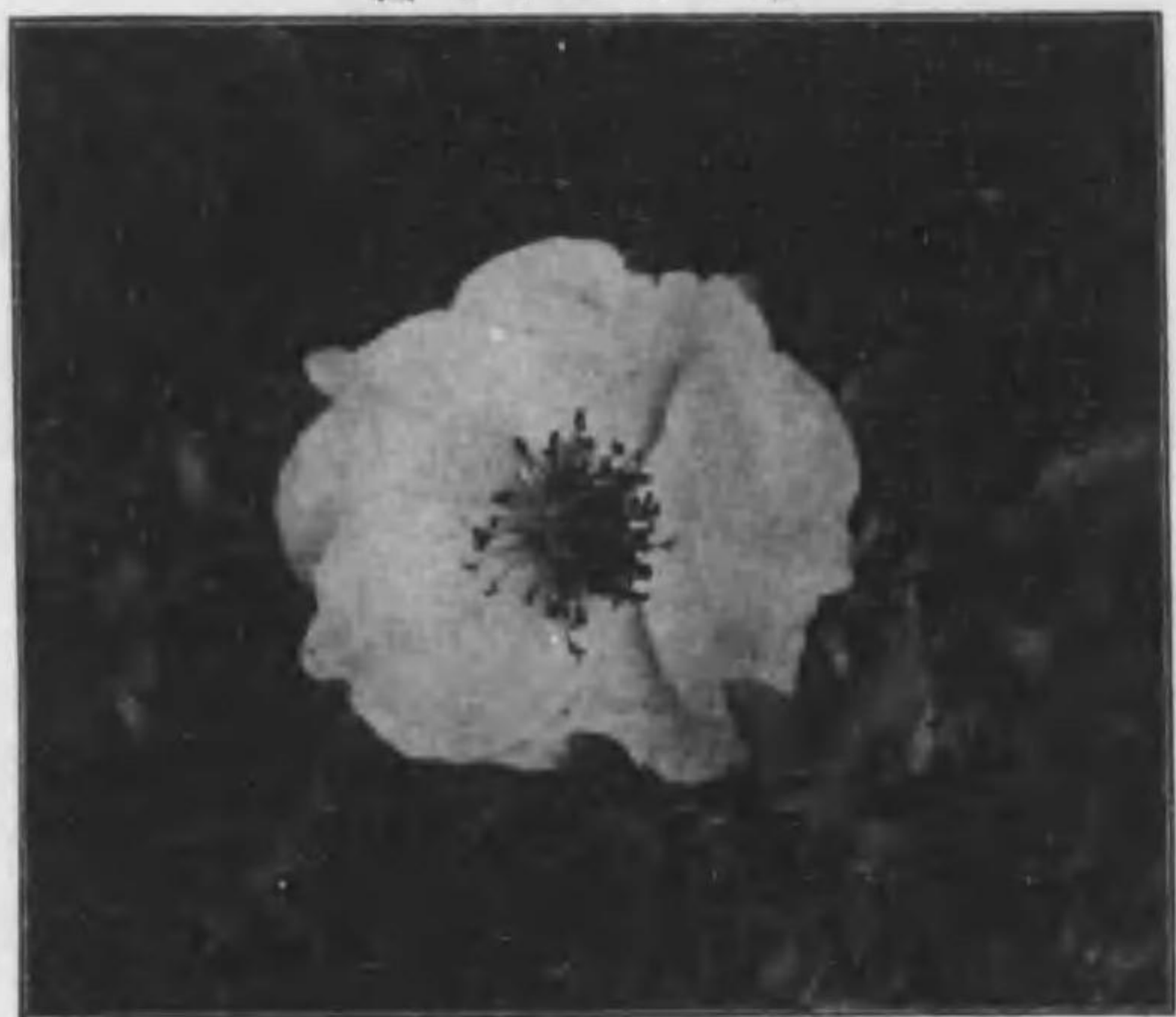
(六) **ローザ、レーヴァイガタ** (*R. laevigata*, Michx.) 此の種は邦名を**ナニハイバラ**(金櫻

子)と稱し、英名を**チェロキー、ローズ** (*Cherokee Rose*)と云ひ蔓性の常綠灌木にして、枝條綠色を呈し、刺多し。葉は三箇の小葉より成れる複葉にして、小葉は卵狀橢圓形又は卵狀披針形をなし、葉縁に鋭鋸齒あり。五六月頃褐色の刺毛を密生せる花梗を生じて開花し、萼にも刺毛あり。白色五瓣の大花にして、稍々ツバキの花に似たり。變種には紅色の花を開くもの並に重瓣花を開くものもあり。**ハトヤイバラ**は之に屬す。

(七) **ローザ、キネンシス** (*R. chinensis*, Jacq.) 此

の種は一名**ローザ、インデカ** (*R. indica*, Lindl.)にして、英名を**チャイナ、ローズ** (*China Rose*)又は**ベンガル、ローズ** (*Bengal Rose*)と稱し、支那の原産にして、莖は低く直立し、葉は三箇乃至五箇(時に七箇)の小葉より成り、小葉は卵形乃至橢圓形にして尖り、

圖七十二百二第



ラバイハニナ

葉縁に鋸齒あり。葉の表面は、暗綠色にして光澤に富み、裏面は淡綠色を呈す。花は大にして芳香あるを常とし、花色に紅、白、黃、白等あり。尙ほ此の種には變種頗る多し。今其の主なるものを擧ぐれば次の如し。

(イ) フラグランス (var. *fragrans*, Thory) 此の變種は、英名をティーセントレッド、ローズ (Tea-scented Rose) 又はティーローズ (Tea Rose) と稱し、香氣甚だ高きを以て名あり(此の變種につきては後に述ぶべし)。

(ロ) インヂカ (var. *indica*, Koehne) 此の變種は、其の學名を別にローザ、インヂカ (R. *indica*, L.) と稱し、英名をモンズリー、ローズ (Monthly Rose) と稱す。我國に於て月季花と稱するものは即ち是にして、其の渡來は頗る古きものゝ如し。莖は高さ四五尺に達し、刺を有す。花は紅色を常とするも白色のものあり。四季に開花するを以て、シキサクイバラとも云ひ、又長春花の名あり。

(ハ) セムベルフロレンス (var. *semperflorens*, Nichols.) 此の變種は、其の學名を別にローザ、セムベルフロレンス (R. *semperflorens*, Curt.) 又はローザ、ベンガレンシス (R. *Bengalensis*, Pers.) と稱し、英名をクリムソン、チャイニース、ローズ (Crimson Chinese

Rose) と云ふ。矮性の灌木にして細き暗綠色の枝梢を有す。小葉は薄くして多くは紫色を帯び、花は紅色にして、細き花梗の上に生ずるを常とす。本邦にてポタンバラ(寶相花)と稱するもの是に屬す。

(ニ) ヴイリディフローラ (var. *viridiflora*, Dipp.) 此の變種は、英名をグリーン、ローズ (Green Rose) と稱し、花瓣は狭小なる綠葉に變じ、綠色の花(青花)を開くを以て名あり。

(ハ) ローザ、センチフォリア (R. *centifolia*, L.)

此の種は歐洲に古來多く栽培せらるる(希臘羅馬時代に栽培せられたるものは本種なるが如し) 落葉灌木にして三尺許りの高さに達し、刺あり。葉は五乃至七箇の卵形をなせる小葉より成り、葉縁に鋸齒あり。花は大形にして紅色又は白色の重瓣を有す。西洋

圖八十二百二第



ズーロスツモ

薔薇と稱せらるるものは即ち是にして、英名をキャベージ・ローズ (Cabbage Rose) と稱す。彼のモツスローズ (Moss Rose) と稱し、四五尺の高さに伸長し、萼及び花梗に苔を着けたるが如き觀あるもの、并にボンボン・ローズ (Pompon Rose) と稱して小形の葉并に小形の重瓣花を有する矮性種等は皆本種の變種なりとす。

(九) **ローザ、ウイクライアナ** (R. Wichuriana, Crep.) 此の種は、邦名をテリハノイバラ英名をメモリアル・ローズ (Memorial Rose) と稱し、本邦の原野特に海濱に多く自生する灌木にして、枝條は通例地上を匍匐す。葉は奇數羽狀複葉にして、小葉は卵形又は橢圓形をなし、光澤に富み、葉縁に鋸齒あり。花は夏間、野薔薇に後れて開き、白色にして芳香あり。

(十) **ローザ、モシヤタ** (R. Moschata, Mill.) 此の種は、英名をムスク・ローズ (Musk Rose) と稱し、邦名をジャカウバラと云ふ。蔓性の落葉灌木にして、葉は五箇乃至七箇の小葉より成り、小葉は橢圓形又は卵形にして先端尖り、葉縁に鋸齒あり。花は白色を早し、麝香の如き芳香あり。是れムスク・ローズの名ある所以にして、花期は初夏の頃とす。南亞細亞の原産とす。

(十一) **ローザ、ダマセナ** (R. Damascena, Mill.) 此の種は、英名をダマスク・ローズ (Damask Rose) と稱し、高さ四尺許りに達し、數多の刺を有す。葉は五箇又は七箇の小葉より成り、小葉は卵形にして葉柄に刺多し。花は大にして數箇簇生し、白色又は紅色にして芳香あり。西亞細亞の原産とす。

(十二) **ローザ、エグランテリア** (R. Igularia, L.) 此の種は、英名をオーストリアン・ブライアー (Austrian Brier) と稱し、五乃至九箇の小葉より成る葉を有す。小葉は卵形にして鋸齒あり。花は大にして黄色を呈す。

以上述べたるもの、外、ローザ屬には尙ほ數多の種あれども、其の主要なるものは大略右に述べたるが如し。而して之等の原種は又種々に交配せられて多くの雜種を生ずるに至れり。今現今栽培せらるる薔薇の中、重要なものを擧ぐれば、大略次の如し。

(一) **ハイブリッド、パーペチュアル・ローズ** (Hybrid Perpetual Rose) 此の類に屬するものは月季花の如きものにボルボン・ローズ (Bourbon Rose)・ダマスク・ローズ (Damask Rose) 等を交配して育成せるものにして、ボルボン・ローズはローザ、インディ

カに由来せるもの、如く、ダマスク、ローズに就きては既に述べたるが如し。此の種類の属するものは概ね強健にして、丈高く伸長し、花は美大にして香氣頗る高きも(香氣低きものもあり)、一季咲にして五六月頃に開花するのみとす。花は紅淡紅白等單色のもの多し。本邦にて比較的古く栽培せらるゝ陽臺夢 (Paul Neyron)、桃園 (Captain Christy)、不二 (Frau Karl Druschki) 等の品種は何れも此の類に属す。

(ニ) **ティーローズ** (Tea Rose) 此の類はローザ、キネンシス即ちローザ、インデイカの一變種に属し、茶の如き一種の香氣あるを以て、一名ティーセンテッド、ローズ (Tea Scented Rose) の稱あり。嫩梢は通例濃紅色を帯び、嫩葉も亦紅色を帯びて美なり。是れ前のハイブリッド、パーベチュアル(枝葉綠色を呈す)と異なる點なり。尙ほ本類の薔薇は四季咲にして晩春より秋に亘り、續々新梢を發生して開花することも亦前類と異なる所なりとす。其の他花蕾の美觀を呈することも亦本類の稱揚せらるゝ所なれども、樹勢一般に弱くして高温を好み、霜雪に對する抵抗力弱きの缺點あり。されば本類の地植となせるものは、秋末根元に盛土をなして二三寸許り幹を被ひ、枝幹を葉にて包圍するを可とす。本邦にて比較的

古く栽培せらるゝ千里香 (Gloire de Dijon)、金光殿 (Marie van Houtte)、西王母 (Safrano)、末廣 (Mrs. Herbert Stevens) などの品種は之に属す。

(三) **ハイブリッド、ティーローズ** (Hybrid Tea Rose) 此の類は前兩類の雜種によりて成れるものにして、近年特に著しく改良せられたるものなり。本類の薔薇はハイブリッド、パーベチュアル、ローズよりも嫩梢嫩葉の色美しくして開花期間長く、所謂四季咲種に属し、而かもティーローズよりは強健にして枝梢よく伸長し、花の美大なるを常とす。要するに、本類は前兩類の中間にありて兩者の特長を兼有するものにして、現今最も多く栽培せられ、品種の數甚だ多し。本邦にて比較的古くより栽培せらるゝ所の天地開 (La France) の外、敷嶋 (Kaiserin Augusta Victoria)、天晴 (White Killeney)、金鴉 (Sunburst) 等の諸品種は之に属す。

(四) **ノアゼット、ローズ** (Noisette Rose) 此の類はローザ、キネンシスとローザ、モシヤタとの雜種にして、西歴千八百十四年に佛國巴黎のノアゼット (M. Louis Noisette) によりて世に紹介せられたるものなるも、爾後大に改良せられて今日に及び。本類の薔薇は蔓性にして多くの花を簇生し、多くは四季咲なりとす。

(五) ウイクライアナ、ローズ (Wichuriana Rose) 此の類はウイクラアが西暦千八百五十九年より同千八百六十一年の間支那旅行の際に発見したるものにして、元來支那及び本邦に野生する薔薇なるも千八百七十三年歐洲に輸入せられてよりタイー、ローズ、アゼット、ローズ、ポリアンサス、ローズ等と交配して育成せられたる雜種なりとす。本類は性强健にして一年間に一丈許りに伸長するがゆゑに、日照よき位置に柱などを立て、之に巻きつくるときは頗る美觀あるものとす。花は多く單瓣にして紅白の色あり。品種頗る多し。

(六) ムルティフローラ、ローズ (Multiflora Rose) 此の類は本邦及び支那に産する野薔薇の改良せられたるものにして、花には一重半八重八重などあり。開花期間はウイクライアナより短きも猶ほ數週間に亘りて開花し、且つ之よりも強健なり。アーチなどの裝飾用に適す。

(七) ポリアンサ、ローズ (Polyantha Rose) 此の類は野薔薇性の四季咲にして花輪小なるも、多數の花を着くる房咲なるを以て花時頗る美觀あり。蔓性にしてよく伸長するも、ドワーフ、ポリアンサ (Dwarf Polyantha) と稱し矮性のものあり。尚

ほ此の矮性種中には一年バラ又はベビー、ローズ (Baby Rose) と稱し、春播種し秋花壇の縁植などに用ふるに可なるものあり。

以上の外、尚ほモッス、ローズ (Moss Rose)、ボルボン、ローズ (Bourbon Rose)、チャイナ、ローズ (China Rose)、ベルネチアナ、ローズ (Pernetiana Rose)、ヌーザ、ローズ (Rugosa Rose)、ムスク、ローズ (Musk Rose) 等も亦栽培せらる。

繁殖 薔薇の繁殖には播種、挿木、接木、壓條等の諸法あり。就中普通に行はるゝものは接木及び挿木にして、播種は新品種の育成又は砧木の養成などに用ひらるゝものとす。尚ほ新品種の育成には雜種法によりて收めたる種子を播くを可とし、又枝變りを利用して接木、挿木などを行ふ。

播種 薔薇の種子は乾燥すれば發芽力を損するがゆゑに、秋に取播となす外は播種期まで果實を土中に埋藏し、播種期に至り掘り出して果肉を洗ひ去り、種子のみ集めて播くものとす。取播を行ふには秋果實の紅熟せるものを收め、之を破碎して種子を採收し、附着せる肉片などを洗ひ去りたる後砂質の土壤に播くものにして、通例翌春に發芽するものとす。尚ほ播種は往々三四月頃に行は

れ温室にては十一月頃に行ふことあり。温室に於ける播種は浅き箱又は平鉢などに於てし、之に入るゝ土壤は一定せざるも、畑土に腐葉土川砂などを混じ、細き目の篩を通したるものなど用ひらる。而して播種し終れるものは硝子板を覆ふて、夜間華氏五十度を下らざる處に置き、灌水に注意するものとす。

挿木 には露地に於てするものと温室又は木框内に於てするものとあり。前者は野薔薇、カウシンバラなどの如き砧木用バラ又は下等の品種を繁殖するに用ひられ、上等の品種を繁殖するには後法によらざるべからず。露地に於ける挿木は春秋二季に行ひ、春の挿木は二三月頃芽の少しく動き始めたる頃に、前年生枝梢の成熟せるものを取り、一尺内外に切りて、豫め準備せる砂質土の苗床に三四寸ほど挿すものとす。又秋の挿木は其の年に發生したる枝のよく成熟せるものに前年生の枝を極僅に附して切り取り、七八寸の長さを残して上端を切り去り(上部の葉一二枚を残して他を切り去る)て三四芽許りを地上に露出せしめて挿すものとす。挿木せる床には日除をなし、時々灌水して乾燥の虞なからしむべく、且つ防寒に注意すべし。又上等の品種を温室又は木框内にて挿木

するには秋末乃至初冬に於てするを可とし、充實せる新梢をば、二三芽を附して切り取り、細砂又は鹿沼土を盛れる挿木床に挿し、葭簀などにて日光を遮り、時々灌水して乾燥を防ぐときは、三四十日にして大抵發根するが故に、根の十分に發生したる後一本づゝ丁寧に掘り取りて小鉢に移植するものとす。尚ほ排水よき砂質土を入れたる小鉢に挿し、十分に灌水したる後、其の小鉢をば更に大鉢の土中に埋め、硝子鐘(釣鐘形の硝子)を覆ふて氣通を塞ぎ、毎日鐘内に附着せる水分を拭ひ去る外は、常に硝子鐘を覆ひ、挿穂の發根するに至りて漸次に氣通を多くし、一二週間の後全く硝子鐘を除去するときは、發根良好なるものとす。

接木 は薔薇の繁殖上最も普通に用ひらるゝものにして、枝接と芽接との兩法あるも、本邦にて多く用ひらるゝは枝接にして、就中、切接法多く行はる。砧木としては本邦にては主として野薔薇を用ひ、野生のものを掘り取りて之に供することあるも、播種又は挿木によりて繁殖せるものを用ふること多し。接木の時期は切接にありては春發芽前(二三月頃)を可とし、接木の方法は果樹などに行ふものに等し。此くて接木終れば成るべく硝子障子の覆蓋を有する木框内に

植ふ込み、接穂の頂が隠るゝほどに土を被ひ硝子障子の覆蓋をなし、更に其の上
に日除をなして日光の直射を避くべく、芽の伸び始むる頃には日除を除く、且つ
時々灌水して乾燥の虞なからしむべし。要するに接木せるものは、日光の直射
することなく且つ風雨の害なき場處に置くを可とす。又温室内に於ける接木
は鉛筆ほどの太さある野薔薇を小鉢に植付け、之を砧木となして鉢植のまゝ切
接を行ふものにして、接木後は浅き箱の内に入れて硝子の蓋をなし、屢々灌水を
行ふて鉢の乾燥を防ぐことに多大の注意を拂ふものとす。接木の時期は一定
せざるも、通例一二月頃にして、三十日許りを経ば大抵活着し、秋には開花するに
至る。一般に薔薇は砧木より發芽し易きものにして、之を放任するときは、接穂
の勢力を殺ぎ、其の枯死を招くの虞あるがゆゑに、接木後はよく注意して砧芽の
除去に努めざるべからず。

芽接は、本邦にては、切接の如く廣く行はれざるも、歐米にては之を採用するこ
と多し。其の時期は七八月頃を可とし、砧木には實生の若きものを用ふべく、接
合の方法は果樹などの芽接と同様なりとす。

花壇植

薔薇は、花壇植によく、又鉢植に適し、蔓性のものはアーチ・トンネルな
どを造り、格子籬・柱などに纏はしむるに可なり。薔薇花壇を造るに當りて、第一
に注意すべきは土質及び位置なり。薔薇は肥沃にして排水よく且つ稍々粘質
なる壤土を好み、日當り風通しよくして而かも風の強く當らざる位置に植付く
るに適す。而して腐植土・火山灰土・砂土などの如く輕きに失する土壤には粘土
の如きものを加へ、粘重に過ぐる土壤には砂などを加へて改良するを可とす。

花壇の形狀は庭園の状態、栽培者の嗜好等によりて一ならざるも、花草の場合に
於けるが如き複雑なる形を避け、樹の長短、開花期の早晩、花色等に顧みて配合よ
く植込むべし。其の植付時期は晩秋又は早春を可とし、寒氣の烈しき地方にて
は春植となす方安全なるべし。植付の距離は品種・仕立方等によりて一ならず。
植付の際は徑一尺五寸深さ七八寸位の穴を掘り、基肥としてよく腐熱せる厩肥
に骨粉・灰・骨粉の代りに過磷酸石灰を用ふるも可なり、などを加へたるものを施
して、穴底の土壤によく混和したる後、少しく土を被ひ、苗の根を擴げて苗を直立
せしめ、接木苗にありては、接合部の少しく隠れるほど土を被ひ、十分に灌水すべ

●此の際地
上部も亦通
常に刈込む
ものとす。

し。此の際苗は根の乾燥せざるやう注意し、適當に切りつめたる後深きに失せざるやう植付くべく、爾後は適宜補肥を施し、又甚しく乾燥せば水を灌ぐべく、又寒氣の烈しき地方にては冬間霜掩をなすを可とす。斯くて毎年秋末には基肥として腐熟せる厩肥(牛糞賞用せらる)に骨粉・灰などを混じたるものを施し、又開花の前後に稀薄なる液肥(下肥又は油粕・魚肥等の液肥)を少量づゝ數回に施すを可とす。其の他砧芽は發生するに従つて除去すべく、又適宜中耕をなして土壤を膨軟ならしめ、且つ害虫の驅除に注意し、寒冷の地にありては冬季防寒の法を施すべし。尙ほ美大なる花を開かしめんがために花蕾の摘除を行ふも、房咲などの如く數多開花せしむるものには之を行はざるものとす。

鉢植 薔薇を鉢植となすには、先づ鉢の底に木炭屑などを薄く敷き入れて排水を良くしたる後、其の上に豫ねて準備せる培養土を入れて苗を植付くるものにして、此の際、根の間に土の十分に入り込むやう注意し、細目の如露にて十分に灌水すべし。培養土の調製は一定せざるも、荒木田に腐熟せる堆肥(此の堆肥中には少しく骨粉・油粕・灰などを加へ置くを可とす)を混和せるものなどを可とす。

又鉢は素焼を可とし、當初は徑六寸許りのものを用ふるも薔薇の繁茂するに従つて漸く大なる鉢に移すものとす。植付の時期は花壇植に等し。手入としは油粕・魚肥などの液肥を稀釋して、時々施すべく、夏季は又特に灌水に注意すべし。其の他の手入は花壇植に準ず。

鉢植の薔薇は毎年植換を行ふべく、其の期節は植付の時季に等し。植換を行ふには、先づ鉢を叩きて根より土の分離せざるやうに抜き取り、上方及び周囲の土を少しく削り去りたる後、別の植木鉢(鉢の底には木炭屑などを入れて排水に便ならしめたる後培養土を少しく入れたるもの)に移し、其の周囲は培養土を以て間隙なきやうに填充し、更に上部にも培養土を被ふものとす。尙ほ鉢を置く場處は日照のよきを可とし、冬季寒氣の烈しき地方にては、適宜防寒の設備をなすべし。

仕立方 薔薇の仕立方には種々あり。今其の主要なるものを擧ぐれば次の如し。

(一) **スタンダード仕立(Standard)** 此の仕立方に於ては地上二三尺の高さまでは

一本の主幹となし、其の頂に數枝を發生せしめ傘形などに剪定して開花せしむるものとす。此の仕立方に於ては春發芽前に強き剪定を行ひ少數の強健なる枝のみを残し、且つ之等も二三芽を残して剪定するものにして、ハイブリッド、パーベチユアル、ハイブリッド、テイーなどの如き種類は此の仕立方に用ひらるゝものとす。尙ほ此の仕立方に於ては野薔薇の如きものを用ひ、處要の高さに伸長せる頃摘心して二芽を發生せしめ、之に處要の品種を芽接したる後、反覆二三芽を残して短く剪定し、以て幹頂に數枝を發生せしむるの法を用ふることもあり。又此の仕立方の一種にウイクライアナ種などを用ひて幹頂より數枝を垂下せしめて開花せしむるものもあり。

(二) 叢狀仕立 (Bush) 此の仕立方に於ては全體の高さを二三尺に止め、根際より數枝を發生せしめて開花せしむるものにして、種々の薔薇に用ひらる。

以上の外、蔓性種を用ひてアーチ形、トンネル形、鑿形等の仕立方をなすこと行はる。

剪定

剪定は、薔薇の栽培上甚だ大切なる手入にして、之を怠るときは、樹姿亂

雜となりて外觀惡しきのみならず、不要の枝梢によりて養分を徒費せられ、美大の花を開くべき枝の發育を害するの弊あり。されば、花壇植たると鉢植たるとに論なく、すべて剪定を施すを肝要とす。之れがためには、其時期と方法とに注意すべく、徒に枝梢を刈り込むは却て害あり。剪定の時期は早春にして、品種によりて多少遲速あるも、越年せる芽の漸く膨みて將に開かんとする時を可とす。剪定の標準は、先づ密に過ぎたる部分の枝、并に枯死せる枝などを除き、且つ古枝、其他弱勢の枝を極めて短く剪り込むべし。蓋し、古枝、其他弱勢の枝は強勢の新梢を發生し難く、從て美大の花を開かしめ能はざるを例とするがゆゑに、之等は其の基部の一二芽を残して切り去るも、枝梢密生の虞ある場合には全く剪除するを可とす。而して新枝の強勢なるものは、最も大切の枝なるも、其の伸長せるまゝに放置するとき、樹姿を亂すのみならず、強勢の新梢を發生せしめて、之に美大の花を開かしむるに適せざるがゆゑに、通例適宜剪定するを要す。但し、其の剪定法は、品種并に仕立方によりて一ならざるものにして、例へば蔓性種特に前年生枝梢の先端に近く開花する習性あるものは、僅に枝端を剪除するに

過ぎざるも、多くは枝端を半分ばかり剪除するか、又は各枝二三芽を残して短く剪定し、以て強勢の枝を發生せしむるものとす。尙ほ四季咲種にありては、春咲の花褪色せば、其の落下するに先だち、基部の二三芽を残して切り去るべく、弱枝も亦此の際剪除すべし。其の他、夏間、新梢密生して鬱閉を來たすときは、適宜夏季剪定を行ふべく、砧木より發生する芽は、常に注意して剪除すべし。尙ほ一季咲の蔓性種は、開花の終るを待つて、他種に於ける春季の剪定と等しく十分に刈込を行ひ、爾後發生する枝は、妄りに剪定せざるを可とす。要するに、薔薇の剪定は、春の外、夏及び秋に行ふも、蔓性種以外は、概ね毎年三月頃に大剪定を行ひ、以て樹姿を整ふると共に、美大の花を開かしむるものとす。

温室栽培

薔薇は、切花採集を目的として、温室に栽培せらる。其の法一ならざるも、前に述べたるが如く、二月頃野薔薇を砧木として、温室内にて切接を行へるものは、秋には數尺に成長して開花するがゆゑに、其の花を切り取りたる後は、追肥を十分に與ふべし。爾後數回切花を採收する毎に、補肥を十分に與へ、翌年夏に至れば、灌水を止めて休眠せしむ。然るときは、枝幹に多少の小皺を生じ、葉

が脱落せんとするに至るを以て、此に於て、枝幹を短く剪定し、十分に灌水するときは、樹勢回復して盛に成長し、再び開花を始むるに至る。要するに、温室にては、秋より冬に互りて開花せしめ、之を切り取りて販賣するを常とし、開花期間の長き四季咲種を用ひて栽培するを常とす。

索引のー

ア

アキレア..... 249-250
 アキノキリンサウ..... 268
 アクロクリナム..... 86-87
 アサガホ(牽牛花)..... 95-162
 アザミギク(薊菊)..... 312
 アザミヤグルマ..... 12
 アザレア..... 384-385
 アスター..... 296-298
 アツモノ(厚物)..... 304
 アツモノハシリ(厚物走)..... 305
 アツモリサウ..... 347
 アフリカン、デージー..... 36
 アマダマシ..... 272
 アメリカナデシコ..... 233
 アラセイトウ..... 6-8
 アルクトチス..... 35-36
 アルメリア..... 189-191
 アロンソア..... 45-46
 アワモリシヨウマ..... 216-217
 アチハナ(青花)..... 109
 アンクーザ..... 259-261
 アンドンシタテ(行燈形)..... 143-145, 155

イ

イカリサウ..... 192
 イザヨイバラ..... 392
 イセギク(伊勢菊)..... 310
 イセナデシコ(伊勢撫子)..... 232
 イチネンバラ..... 401

イチモンジギク(一文字菊)..... 302
 イトラン..... 263-264
 インカーヴァイレア..... 280

ウ

ウアンダ..... 335-337
 ウイクライアナ、ローズ..... 400
 ヴイスカリア..... 14-15
 ウイングリーフ、バターフライフラワー..... 39
 ヴエルグエナ..... 239
 ヴエロニカ..... 276-277
 ウォール、フラワー..... 191
 ウキツリホク(フクシアに等し).....
 ウツセイ(渦性)..... 120
 ウラシマサウ(ヒヤクニチサウに等し).....
 ウンゼンツツジ..... 386

エ

エウ(曜)..... 119
 エソギク(翠菊)..... 164-169
 エリゲロン..... 244-245
 エーリデス..... 333-335
 エンメイギク(ヒナギクに等し).....

オ

オイランサウ(クサケフチクタウに同じ).....
 オシロイバナ..... 272-273
 オダマキ..... 214-216
 オックス、アイ、デージー..... 251
 オックス、リツブ..... 199

オトメギキヤウ	49
オヒカカヘ(追抱)	306
オビユム、ボツビー	28
オホケダテ	169-170
オホツカミザキ(大掴咲)	305
オホハルシヤギク	178
オホハンゴンサウ	269-270
オホバナテンチクアフヒ	357
オホマンテマ	23
オホムラサキ	382-383
オラン(スルガランに同じ)	
オランダセンニチ	89-90

カ

カウシンバラ	394
カウスリツブ	198
カウスキサウ(ヘリオトロブに同じ)	
カ、へ(抱)	122
カクトラ(角虎)	284-285
カツトレア	343-346
カナダアキノキリンサウ	267-268
カーネーション	223-230
カハラナデシコ	230-231
カハリザキ(變り咲)	130-135
カヒザイク(貝細工)	84-85
カヒザキギク(貝咲菊)	312
カプトギク(トリカプトに同じ)	
ガーベラ	242-243
カライトサウ	243
カラナデシコ(石竹)	231
カリフォルニア、ボツビー(ハナビシサウに同じ)	
カルセオラリア	236-239
カンクワン(間管)	303

カンザクラ	202
カンチタフト	33-34
カンバヌラ	46-49
ガンビセンテウ(ガンビに同じ)	257
カンラン(寒蘭)	352

キ

キキヤウ(桔梗)	278
キク(菊)	298-329
キクバテンチクアフヒ	357
キセイラン(氣生蘭)	332
キダチ(木立)	98
キダチカーネーション	225
キダチルリサウ	363
キバナチダマキ	215
キバナノコギリサウ	250
キミガヨラン	264
キュービツド、スウィート、ビー	57-58
ギョクチンラン(玉鏡蘭)	352
キリ(桐)	122-123
キリシマ	378-380
キンギヨサウ	240-241
キンケイギク	80-81
キンセンクワ	3-5
キンレンクワ(ノウセンハレンに同じ)	

ク

クカイサウ	277
クサケフチクタク	255-256
クジャクサウ	72-73
クダモノ(管物)	303-304
クフエア	367-368
クマガイサウ	347
クリンサウ	200

グリーン、ローズ	395
クルマザキ(車咲)	113
クルマザキボタン(車咲牡丹)	156-157
クルヒギク(狂菊)	305
クルメツツジ(キリシマに同じ)	
クレオメサウ	79-80
クロタネサウ	38-39
クロフネツツジ	386
クワクカウアザミ	64-65
クワンカカヘ(管抱)	307
グワンジツサウ(フクジュサウに等し)	
クワンベン(管瓣)	303
クワンベンザキ(管瓣咲)	113

ケ

ケイトウ	172
ケザキ(毛咲)	113
ケシ	28
ケマンサウ	208-209
ケマンボタン	208-209
ケロネ	287-289
ゲント、アザレア	385

コ

コウワウサウ	72-73
ゴエフツツジ	386
コケフロツクス	254-255
コスモス	177-179
コツクス、コム	172
ゴテチア	43-44
コテフラン(胡蝶蘭)	338
ゴールデン、グロー	269
コーン、フラワー	11
コーン、ボツビー	29

コンギク	297
------	-----

サ

サイザキ(采咲)	111
サイザキボタン(采咲牡丹)	157-160
サガギク(嵯峨菊)	309
サクラサウ	195
サグリボタン(探牡丹)	134
サ、(笹)	125-126
サジベン(匙瓣)	303
サツキ	380-382
サルビグロツシス	44-45
サンガイソルバ	274
サンゴバナ	281-282
サンシキスミレ	1-3
サンセウイバラ	391

シ

シウメイギク(秋牡丹)	293-294
シタン	296-297
シキザキイバラ	394
シキザキサクラサウ	203
シザンサス	39-40
シシザキ(獅子咲)	131, 160
シセンカカヘ(自然抱)	308
シチヘンゲ	366
シネラリア	17-21
シノヅクリ(篠作)	310, 327
ジフソフィラ	36-37
シブリベチユーム	346-349
シヤウギク(正菊)	305-306
ジヤカウテンチクアフヒ	357
ジヤカウナデシコ	224
ジヤカウバラ	396

ジャカウレンリサウ(カネーションに同じ) 209-213
ジャクヤク 21-22
ジャコベア 253-254
ジャノメギク 82
ジャバニース、プリムローズ 200
シユクコンヒマハリ(宿根向日葵) 175
シユンラン(春蘭) 351
シルバーシネラリア 18
シレネ 23-24
ジンジャヤ 294-295

ス

スウィート、アリツサム 32-33
スウィート、サルタン 11
スウィート、ピー 54-62
スカピオザ 74-75
スズメザキ(雀咲) 113
スタテイス 261-263
スターフロックス 51
ストークス、ビル(セラニウムに同じ) 248-249
ストケシア 248-249
ストツク 6
スナツブドラゴン(金魚草) 240-241
スパイレア 216-217
スルガラン(建蘭) 351
スキセンチウ 256-257

セ

セイヤウチダマキ 215
セイヤウサクラサウ 197-198
セイヤウノコギリサウ 250
セウム 243-244
セキコク(石斛) 341

セツクワ(石化) 99
セラニウム 355-357
センチウ 258
センジュギク 72
セントランサス 40-41
セントーレア 10-12
センニチサウ(千日紅) 87-88
センニンゴク(ヒモケイトウに等し)

ソ

ソシンラン(素心蘭) 352
ゾーナル、ペラルゴニウム 356
ソリダゴ 267-268

タ

タイキウクワ(堪久花) 84
ダイザキ(壺咲) 113
タイマツバナ 275
ダイリンザキ(大輪咲) 129-130
タウキンセン 4
タカネバラ 392
タチアフヒ(蜀葵) 265-267
タツチ、ミー、ナツト 93
タツタ(立田) 125
タマケイトウ(玉鶴冠) 172
ダマスク、ローズ 397
ダンギク 289-290

チ

チエリー、バイ 363
チセイラン(地生蘭) 333
チヤイナ、ローズ 393, 401
チヤウジュラン(金稜邊) 350
チヤウシユンクワ 394

チヤウジギク(丁子菊) 310-311
チリダイコンサウ(セウムに等し) 243-244

ツ

ツクバネアサガホ 51-54
ツタバテンチクアフヒ 356
ツツジ 377-389
ツバメスチ(燕筋) 128
ツマナリカカヘ(接折抱) 307
ツリウキサウ 360-361
ツリカゴ(吊籠) 334, 339
ツリガネヤナギ 248

テ

ティー、センテツド、ローズ 394, 398
ティー、ローズ 394, 398
テナガスチ(手長筋) 128
テポタン 386
テリハノイバラ 396
テンチクアフヒ 355-360
テンドロビニウム 340-343
テンニンギク 66-67

ト

トコナツ(常夏) 232
トコナデシコ 232
ドザキ(度咲) 115
ドラモンド、フロックス 50-51
トリカブト 290-291
トリカブトザキ(鳥甲咲) 113
トレニア 67-69
ドワーフ、ホリアンサ 400

ナ

ナゴラン 333, 335
ナスターチュム 63
ナデシコ 230-231
ナナコギク(魚子菊) 312
ナニハイバラ 389, 392-393
ナミセイ(並性) 119-120
ナンテン(南天) 128

ニ

ニゲラ 38-39
ニチニチサウ 278-279
ニチユウザキ(二重咲) 115
ニホヒアラセイトウ 191-192
ニホヒスミレ 185-187
ニホヒヤグルマギク 11

ネ

ネメジア 76-77
ネモフィラ 9-10

ノ

ノアセット、ローズ 399
ノイバラ 390-391
ノウセンハレン 63-64
ノゲイトウ 172
ノコギリサウ 249-251
ノナデシコ 230
ノバラ 390-391

ハ

バイクワイカリサウ 193
ハイブリッド、ティー、ローズ 399
ハイブリッド、パーベチュアル、ローズ 397-398

ハウキヅクリ(簪作)..... 308-309
 ハゲイトウ..... 173
 バスケツト、フラワー..... 12
 ハトヤイバラ..... 389, 393
 ハナガサ(ピチヨザクラに同じ).....
 ハナシユクシヤ..... 294-295
 ハナシユンギク..... 41-42
 ハナビシサウ..... 31-32
 ハナワギク..... 41-42
 ハーバシアス、ペオニー(シヤクヤク
 に等し).....
 ハマアラセイトウ..... 8
 ハマカンザシ..... 190
 ハマナス..... 392
 ハマギク..... 252
 バラ..... 389-411
 パリス、デージー..... 364
 ハリフウテウサウ..... 79-80
 バルサム..... 92
 ハルシヤギク..... 81-82
 バンクス、ローズ..... 391
 バンジー..... 1

ヒ

ヒエンサウ..... 15-17
 ヒゲザキ(鬚咲)..... 113
 ヒゲナデシコ..... 233
 ヒゴギク(肥後菊)..... 308
 ピチヨザクラ..... 239-240
 ヒナギク..... 188-189
 ヒナゲシ..... 29
 ヒマハリ..... 174-176
 ヒメカヒザイタ(姫貝細工)..... 87
 ヒメヒマハリ(姫向日葵)..... 175

ヒメマツバギク..... 219
 ヒモケイトウ..... 173
 ヒヤクニチサウ..... 70-71
 ヒロノシ(廣闘斗)..... 302

フ

フアレノブシス..... 337-340
 フイソステジア..... 284-285
 フウリンサウ..... 47
 フウリンザキ(風鈴咲)..... 113
 フオアゲツト、ミー、ナツト..... 25
 フクシア..... 360-362
 フクジュサウ..... 180-185
 フクロナデシコ..... 23
 フシダロセンテウ..... 258-259
 フチボタン..... 208
 フチマンエフ..... 386
 フデケイトウ..... 172
 フトクワン(太管)..... 303
 ブラキコメ..... 42-43
 フランスギク..... 251
 プリムラ..... 194-208
 プリムローズ..... 198
 フレンチ、マリゴールド..... 72
 フロツクス..... 50-51
 プロワリア..... 170-171

ヘ

ペーオニア..... 209, 369
 ペチユニア..... 51-54
 ペニバナサルグイア..... 88-89
 ペニバナベンケイサウ..... 295-296
 ペビー、プリムローズ..... 201
 ヘリオトロープ..... 368

ベルネチアナ、ローズ..... 401
 ヘレニユム..... 286-287
 ベンガル、ローズ..... 393
 ベントステモン..... 245-248

ホ

ホースシユウ、セラニユム..... 356
 ホウセンクワ(鳳仙花)..... 92-93
 ホウラン(鳳蘭)..... 353
 ホクロ(春蘭に同じ).....
 ホソクワン(細管)..... 303
 ボーダー、カーネーション..... 224
 ボタン..... 369-377
 ボタンザキ(牡丹咲)..... 132-134, 156-160
 ボタンザキケシ..... 29
 ボタンバラ..... 395
 ホツビー..... 28-30
 ホリアンサス..... 197
 ホリアンサ、ローズ..... 400
 ホルトニア..... 292
 ホルボン、ローズ..... 401
 ボンボン、ローズ..... 396

マ

マーガレット..... 364-365
 マツバギク..... 218-219
 マツバボタン..... 94-95
 マツムシサウ..... 74
 マツモトセンテウ..... 258
 マトリカリア..... 77-78
 マリゴールド..... 71-74
 マルザキ(丸咲)..... 110
 マルメゾン、カーネーション..... 225
 マンジュギク..... 72

ミ

ミオソチス..... 25-27
 ミノギク(美濃菊)..... 303
 ミムラス..... 234-236

ム

ムギナアシコ..... 13-14
 ムギワラギク..... 83-84
 ムシトリナデシコ..... 24
 ムスク、ローズ..... 396-401
 ムラサキマツバギク..... 219
 ムラサキヤシホツツジ..... 386
 ムルティフローラ、ローズ..... 400

メ

メセムブリアンセマム..... 217-218

モ

モクシユンギク..... 364
 モチツツジ..... 386
 モツカウバラ..... 391
 モツス、ピンク..... 254
 モツス、ローズ..... 396, 401
 モナーダ..... 275-276
 モミヂアフヒ..... 285-286
 モモバギキヤウ..... 48
 モンキー、フラワー..... 235
 モンテンチクアフヒ..... 356

ヤ

ヤグルマギク..... 10-13
 ヤナギ(柳)..... 126-128
 ヤナギウラン..... 79

ヤナギチヤウジ..... 246
 ヤナギバキリンサウ..... 263
 ヤナギメ(柳芽)..... 324-325
 ヤマシヤクヤク..... 210
 ヤマトツジ..... 386
 ヤマタダマキ..... 215

ユ

ユウセンギク..... 298
 ユウテフクワ(サンシキスミレに同じ).....
 ユツカ..... 263-265
 ユフガホ(夕顔)..... 162-163
 ユフギリサウ..... 270-271

ヨ

ヨドガハツツジ..... 383
 ヨルガホ(夜顔)..... 162-163

ラ

ラン(蘭)..... 329-354
 ランギク(亂菊)..... 123-124
 ランギク(ダンギクに同じ).....
 ランタナ..... 365-366

リ

リアトリス..... 282-283
 リウキウツツジ..... 382
 リナリア..... 78-79

ハ

リンダイ(輪臺)..... 325
 リンダウ..... 289

ル

ルカウサウ..... 93-94
 ルゴザ、ローズ..... 401
 ルドベツキア..... 269-270
 ルピナス..... 220-223
 ルーピン..... 220-222
 ルリトラノヲ..... 276
 ルリヒエンサウ..... 16

レ

レーリア..... 346
 レンゲツツジ..... 383-384, 385, 386

ロ

ロクエウカラハナ(六曜唐花)..... 123
 ロシンカカヘ(露心抱)..... 307
 ロダンテ..... 85-86
 ロベリア..... 90-92
 ローベルスキヤツチフライ..... 24

ワ

ワカサギ..... 386
 ワクヅクリ(粹作)..... 327
 ワスレナグサ..... 25-28

索引の二

A

Aconitum 291
 Achilea 249-250
 Acrocrinum 86
 Adams Needle 263
 Adonis 180-185
 Aerides 333-335
 African Daisy 36
 African Marigold 72
 Ageratum 64
 Alonsoa 45-46
 Althaea 265
 Amaranthus 173
 Ammobium 84
 Anchusa 259-261
 Antirrhinum 241
 Aquilegia 214-216
 Arctotis 31-36
 Armeria 189-191
 Aster 296-298
 Astilbe 216
 Austrian Brier 397
 Azalea 384-385

B

Baby Primrose 201
 Baby Rose 401
 Balsam 92
 Banks' Rose 391
 Basket 334, 339

Basket Flower..... 12
 Bell Flower..... 46
 Belle de Nuit 273
 Bellis 188
 Bengal Rose 393
 Boltonia 292
 Border Carnation 224
 Bourbon Rose 401
 Brachycome 42
 Browallia 171

C

Cabbage Rose 396
 Cacalia 176
 Calceolaria 236-239
 Californian Poppy 31
 Calendula 3-5
 Calistephus 164-169
 Calonyction 162
 Campanula 46-49
 Champion 256-258
 Candytuft 33-34
 Canterbury Bells 47
 Carnation 223-225
 Caryopteris..... 290
 Cattleya 343-346
 Celosia..... 172
 Centaurea 10-12
 Centranthus..... 40-41
 Cheiranthus..... 191
 Chelone 288

九

Cherokee Rose 393
 Cherry Pie 363
 China Rose 393-401
 Chinese Bell-flower 278
 Chinese Pink 231
 Chinese Primrose 202
 Cineraria 17-18
 Cleome 79-80
 Columbine 215
 Common Sunflower 174
 Common Thrift 190
 Common Yarrow 250
 Coreopsis 80-81
 Cornflower 11
 Corn Poppy 29
 Cosmos 177-179
 Cowslip 198
 Cox-comb 172
 Crimson Chinese Rose 394-395
 Crown Campion 257
 Cucumberleaved Sunflower 175
 Cuphea 367-368
 Cupid 57-58
 Cymbidium 350-354
 Cypripedium 346-349

D

Damask Rose 397
 Delphinium 15-17
 Dendrobium 340-343
 Dianthus 230-234
 Dicentra 208
 Drummonds Phlox 50
 Dwarf Polyantha 400

E

Emilia 176
 English Daisy 188
 Epimedium 192
 Erigeron 244-245
 Escholtzia 31
 Everlasting Flower 84

F

Fernleaf Yarrow 250
 Forget-me-not 25
 Four O'clock Flower 273
 French Marigold 72-73
 Fuchsia 360-362

G

Gaillardia 66-67
 Garden Pink 232
 Gentiana 289
 Geranium 355-357
 Gerbera 242-243
 Geum 243-244
 Ghent Azalea 385
 Ginger Lily 294
 Globe Amaranth 87
 Godetia 43-44
 Golden Columbine 215
 Golden Glow 269
 Gomphrena 87
 Green Rose 395
 Gypsophila 36-37

H

Helenium 286-287
 Helianthus 174-176
 Helichrysum 83
 Heliotrope 363
 Herbaceous Peony 209
 Hibiscus 285
 Hollyhock 265
 Horse-shoe Geranium 356
 Hybrid Perpetual Rose 397-398
 Hybrid Tea Rose 399

I

Iberis 33-34
 Impatiens 92
 Incarvillea 280
 Indian Cress 63
 Ivy-leaved Geranium 356

J

Jacoea 22
 Jacobinia 281

L

Laelia 346
 Lantana 365
 Large-flowered Show and Fancy
 Pelargonium 357
 Larkspur 16
 Lathyrus 44
 Liatris 282-283
 Limonium 262
 Linaria 78-79
 Lobelia 90
 Lobel's Catchfly 24

Lupine 221-222
 Lupinus 220-223
 Lychnis 13-14, 256-259

M

Malcolmia 8
 Malmaison Carnation 225
 Marguerite 364
 Marigold 71-74
 Matricaria 77
 Matthiola 6
 Memorial Rose 396
 Mesembryanthemum 217-219
 Mimulus 234-236
 Mirabilis 272
 Monarda 275-276
 Monkey Flower 235
 Monthly Rose 394
 Moss Pink 254
 Moss Rose 396, 401
 Mound Lily 264
 Multiflora Rose 400
 Musk Rose 396, 401
 Myosotis 25-27

N

Nasturtium 63-64
 Nemesia 76-77
 Nemophila 9
 Nierembergia 272
 Nigella 38-39
 Noisette Rose 399

O

Oak-leaf Geranium	357	Quamoclit	93
Opium Poppy	28		
Orchid	329-354		
Ox-Eye Daisy	251		
Ox-lip	199		

P

Paeonia	209-210
Pansy	1-3
Papaver	28-29
Paris Daisy	364
Pelargonium	355-357
Pentastemon	245
Pentstemon	245-248
Pernetiana Rose	401
Perpetual Carnation	225
Petunia	51-54
Phalaenopsis	337-340
Pharbitis	95
Phlox	50
Physostegia	284
Platycodon	278
Polyanthus	197
Polyantha Rose	400
Polygonum	170
Pompon Rose	396
Poppy	28
Portulaca	94
Primrose	198
Primrose of the Alps	199
Primula	194-203
Purslane	94

Q

Rodanthe	85
Rhododendron	377-383
Rosa	389-397
Rose	389-401
Rose Campion	256
Rudbeckia	269
Rugosa Rose	401

R

Salpiglossis	44-45
Salvia	88
Sanguisorba	274
Scabiosa	74-75
Scarlet Sage	88
Scented-leaved Geranium	357
Schizanthus	39-40
Sea Lavender	261
Sedum	295
Senecio	22
Shasta Daisy	253-254
Shirley Poppy	30
Silene	23-24
Snapdragon	241
Solidago	267-268
Spilantes	89
Spiraea	216
Star Phlox	51
Statice	261-262
Stock	6
Stokesia	248-249
Stork's bill	355

S

Summer Carnation	224
Sunflower	174-175
Sun Plant	94
Sweet Alyssum	32-33
Sweet Bergamot	275
Sweet Pea	54-62
Sweet Sultan	11
Sweet Violet	185
Sweet William	233

T

Tagetes	71-73
Tasselflower	176
Tea Rose	394, 398
Tea-scented Rose	394
Torenia	67-69
Toutch-me-not	93
Trachelium	270
Tree Carnation	225
Tree Peony	369
Tropaeolum	63

V

Vanda	335-337
Verbena	239-240
Veronica	276-277
Vinca	278-279
Viola	1, 185
Virginian Stock	8

W

Wallflower	191
Wichuraiana Rose	400
Wingleaf Butterfly Flower	39

Y

Yarrow	250
Yucca	263-264

Z

Zinnia	70-71
Zonal Pelargonium	356

昭和十年三月十日印刷
昭和十年三月十五日發行

增訂 花卉園藝 下卷
【定價金五圓】

著作者

佐々木祐太郎

發行者兼
印刷者

河出靜一郎

發行所

成美堂書店

印刷所

文勝社印刷所



東京市日本橋區通三丁目一番地

振替東京一七一九番

電話浪花〇七四六番

東京市神田區材木町十番地

383
154

終